
クロス・ローズ

霜月 雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロス・ローズ

【Nコード】

N97480

【作者名】

霜月 雪

【あらすじ】

悪魔。人の憎しみ、恨みにつけ込み、契約し、殺人を繰り返す生きもの。

そんな悪魔を倒せる唯一の存在が、エクソシストである。

アルディラルド教会エクソシストの、リルディウス・ローズとレインレット・アルス、二人は良き相棒で、お互いを一番に信頼していた。

第一章・あらずじ

数少ない女エクソシスト、リルとその相棒、レインは、ルエルで
きている、とある事件を捜査することになった。

なんでも、ルエルで評判の美女が被害者らしい。次の被害者と予想
される貴族の所へ、二人は護衛として行く。

しかし、その貴族は家庭内事情が少々複雑だった。二人は無事悪魔
を退治することができるのか！？

恋愛ファンタジー！

プロローグ（前書き）

恋愛ファンタジーものです。

なんだか恋愛しか書いてないきがします・・・。

プロローグ

悪魔、とは、人の膨^{ぼう}大な恨み、憎しみにつけ込んで契約をもちこみ、身体をのつとつて殺人を繰り返す生きものだ。

その身体能力は人をこえ、とてもたちうちできなかった。憎しみが強いほど、強い上級悪魔が契約していた。契約期間が長いと、人の身体がもたなくなり、死に絶える。そして悪魔はまた、新しい契約主を捜すのだ。

そんな悪魔を倒せる、唯一の存在が、『エクソシスト』。

彼らは、悪魔と同等の身体能力を持った者たちで構成され、科学者が開発した『対悪魔専用銃』を使い、悪魔を倒していった。契約期間が短い、まだそこまで身体を蝕まれていないものは、銃にうたれると正気に戻った。契約期間が長い者たちは皆、銃にうたれ悪魔が死ぬと灰となった。

そして、各国に、『教会』ができた。教会は、教皇から初め、大司教、司教、エクソシスト、神官たちで構成される。エクソシストは司教と同じ地位をもらい、国民を悪魔から護っていった。

「さあつてと！さつさと終わらせますか」

ぱんと服の埃をはらい、少女は暗闇の中、にこりと微笑んだ。

第一章 1

深夜3時。ほとんどの者達が寝ている時刻に、二つの影が。

片方は40代にさしかかるであろう男性で、目は見開かれ、上質な布でできた、貴族が着ている服には赤黒いものがこびりついていていた。息は荒く、手には同じく赤黒いものがついた刃物 ナイフが握りしめられている。その足の速さは普通の男性にしてはあり得ない速度だ。

もう片方は、漆黒のフード付きのコートをその身にまとい、フードからこぼれる長い髪は金色をしていた。風に遊ばれているその髪は、月光をあびて美しく光っていた。

「ちっ……」

小さく舌打ちして、その人物は手に握られている漆黒の銃を男に向けた。

そして、引き金を引く。銃声が静かな夜の街に響いた。男は撃たれた右肩をおさえ、低いうめき声を上げる。その傷口には、魔法陣がうつすらと浮き出ていた。

「クソエクソシストが……っ」

男は小柄な影をにらみ詰めて、うなつた。すると相手は慣れているのか、クスリと笑う。

「ほら、さつさと観念しなさい？」

わざとらしく肩をすくめて、人物 声音からして少女は銃を男に見せびらかすように軽く振る。

その銃を男は忌々しげに見つめ、そして少女を見て嘲笑を浮かべた。

「たかが人間が……あまり図に乗るなよ。所詮は我々に殺される運命だ……」

楽しそうに醜い笑みを浮かべ、男はナイフを握りしめ、それを力強く少女に向かって投げつけた。そのナイフを少女の額に勢いよく刺さる　　寸前に、少女は腰にさしてあつた銅色の銃を構え、うつ。

すると、銃口から魔法陣が現れ、ナイフをはじく。

男は目を見開いた。少女は楽しそうに笑う。

「さっすがルウ爺！じゃ、次はこれね・・」

そういつて、少女は銅の銃を戻すと、今度は銀の銃を構える。その銃先はまっすぐ男に向いていて。

「・・・・あ・・・・」

男は見事に顔を引きつらせる。

少女はためらいもなく銃の引き金を引いた。

「主神ゼウスの名のもとに、悪の禍々しき魂を救済します！」

普通の銃声より、数倍でかい銃声　　というより破壊音が、夜空に響いた。

「で、結果がこれ　　ということか？」

20代半ばの男性が、頬を引きつらせながらある場所を指さす。そこには無惨に半壊している建物が風にうたれていた。

男の前に不機嫌そうな顔をして座っているのは、10代後半の少

女だ。たつぷりとした金の長い髪に、白い肌。そして大きな青の瞳はまっすぐ前を向いていて、強い意志が宿っている。

その隣に、少女とは対象に行儀良く座っているのは、少女と同じくらいと年頃の少年だった。漆黒の髪に白い肌、紫の瞳。顔立ちは整っていて、その顔は苦笑を滲ませていた。

「そうよ。悪かったわねー」

「もっと誠意を込めて謝れ！まったく貴様はいつも・・・っ」

「あーはいはい！わるーござんした！私も別に好きで壊してる訳じゃないわよ！文句はルウ爺に言つてよ！」

「まった自分を棚上げして・・・！だいたい、貴様が断ればいいだけの話だろうが！」

「別にいいでしょう！？私の『実験』のおかげで新しい武器ができるんだから！第一、壊してるのだって、人気のない小さい建物よ！怪我人死人一人も出てないんでしょ！？」

少女は立ち上がり、そう怒鳴ると、また椅子にどすんと座った。

男は額に青筋をたてながらも、少女をにらむ。

そんな二人の間に先ほどまで座っていた少年が入った。

「ま・・・まあまあ、落ち着いてください。二人とも・・・ほら、リル、そんな仏頂面しない」

眉間にしわを刻み、睨んでいる少女、リルにこれほどまで軽く注意できる人間はそういないだろう。リルはちらりと少年、相棒を見ると、立ち上がった。

「わーかったわよ。けどレイン、私だってはじめは反省してたのよ？なのにそれを聞こうとしないで怒鳴り散らしてきたのは、あっちにいる20代のくせに親父くさいこという男のほうよ！」

「リル・・・さすがにそれは失礼だから。しかもはじめはって、今は反省してないの？」

少し冷たい声になった相棒、レインにリルは顔を引きつらせる。
「や・・・今も反省してるわよ？それはもう、ものすごく・・・」
「そう・・・なら気をつけてね。もう教会のほうにも知らされてる
だろうから。これからリゼルグ司教からの説教も待ってるよ」
「・・・・・・・・」

歩く女性すべてが振り返りそんな微笑を浮かべて、レインは黒い
内容をさらりと口にした。リルは思いっきり顔を引きつらせて、肩
を落とす。

「あーあ・・・最悪・・・」

「恨むなら、毎回任務先で建物壊す自身を恨んでね。リル」

思わず両手で顔を覆うリルの頭を優しくぼんと撫でて、レインは
苦笑した。

そして二人は教会に戻るべく、歩き出す。背後から警官の「処理
手伝えーっっ！」という叫びを聞き流しつつ。。

リルは、苦虫を数匹かみつぶしたような顔をして、ある扉の前に
いた。リルと後ろには、苦笑しているレインの姿が。そんな二人を
見かけた神官たちは慣れているのかちらりと見てその場を去ってい
くだけだ。

リルは数回深呼吸して、扉をノックした。すると中から男性の声
が返ってくる。それを聞き、リルは余計苦々しい顔をした。

「なんでいるのよ・・・！」

小さく呟かれた言葉はレインにも聞き取れなかったようだ。リル
は扉を引いた。

そこには、木材でつくられた机と、一人の男性がいた。
橙色の髪に、同色の瞳をしている。

その人物こそ、リルが今もつとも会いたくなかった人物、リゼルグ司教である。

「リルデウス・ローズ……またお前は……！」

20代にさしかかるであろう若い司教の顔は怒りに染め上げられていた。自分に向けられているわけではないのに、レインは無意識に視線をそらす。

リルは最悪、といった顔でリゼルグを見ていた。

第一章 1（後書き）

改装しています。

前回とは結構話の内容が変更され、キャラの性格も違ってきます。

リルとレインが所属している教会は、アルディラルド教会だ。北の大国、アルディラルドは、一番はじめに悪魔の存在を知り、そして教会を立ち上げた国で、アルディラルド教会は、その国内だけでなく、西、東、南の教会でも『本部』と呼ばれている。ほかの国にも、アルディラルド教会のエクソシストが出張することたまにある。

今のところ、北も西も東も南もうまくやっていて、戦争の兆しはない。それが救いだ。

「またお前は・・・！」

「痛い痛い痛い、いたいいたい！暴力で訴えるわよ！？クソ司教っっ」

「誰がクソ司教だ！上司になんて口の利き方だ！青二才！」

「青二才！？私、16よ！あんたと4つしか変わらないわ。言葉も正しく使えないの？ばあああか！」

「ほお・・・何回いつても建物壊してかえってくる学習能力のない小娘に言われても、痛くも痒くもないわ！教会破産はさんさせるきか！」

リゼルグは、リルの頬を力強く引つ張り、怒鳴った。リルも負け
ておらず、怒鳴る。部屋に罵声が飛び交うなか、レインは若干引き
気味にリルとリゼルグの間に入った。

「ま・まあまあ、リゼルグ司教、そこまでに……。リルも言い
過ぎ。本当、毎回すみません」

「そう思うなら、このじゃじゃ馬を止めてくれ、レインレット」
「無理です」

額に手をあてて、ため息をくりゼルグの訴えに、レインは爽や
かな笑顔で即答した。それにリゼルグの口が引きつる。

「……報告したし、私もう部屋に帰るわよ。すっごく眠い」
リルは不機嫌そうな面持ちで、くるりと踵を返した。しかし、そ
れをリゼルグは止める。

「まで。お前らには新しい任務が入っている」
「……」

リルはしばし沈黙した後、小さく舌打ちした。

「……ちっ」

「こら、聞こえてるぞ。仮にも聖職者が」

「はいはい。で、任務内容は？」

おどけてリルはリゼルグを見る。リゼルグは一つ息を吐くと、口
を重々しく開いた。

「北の街、ルエルで、連続殺人事件が起こっている」

ルエルでの連続殺人事件の被害者の共通点は、皆、街で有名な『美女』達だった。有名な美女は6人。そのうち、4人が既に殺されている。その殺され方は、顔をナイフで何十回も刺され、腹

子宮のあるあたりの場所をそれ以上に刺されていた。リルとレインはその写真を見たが、とても直視できる代物ではなかった。思わず、二人とも写真から顔を背ける。

「・・・で、私たちは残り2人の護衛をしろ、と？」

「そうだ。その2人が姉妹でな。二人も聞いたことあるだろうが、あの『ローサルド』家の長女と次女だ」

「・・・ローサルド・・・。上級貴族ね」

リルは嘲笑を浮かべ、吐き捨てるように言う。

「2人殺された時点で、狙いは美女ってわかってたはずでしょ？ 4人も殺された後に教会に連絡くるってことは、2人が上級貴族だからってわけ？」

リゼルグはリルをただ無言で見つめた。それが肯定と受け取って、リルははっと乾いた笑みを浮かべた。

「あきれた・・・、これだから大人は嫌いなものよ」

いつもとは違うリルと様子に、リゼルグは少し困惑した様子だ。

レインは苦々しい顔をして、リルの頭に手を置いた。

「リルディウス」

いつもは愛称で呼ぶレインが、本名のほうを呼ぶことで、リルは我に返ったように、気まずそうに顔をふせた。

「すみませんでした」

リルは一言そう言っと、踵を返して今度こそ部屋から出た。レインもリゼルグに一礼すると、去っていく。それを、リゼルグはただ見送っていた。

教会には、エクソシストの個室がある。いわば、学校の寮というやつだ。それぞれシャワー室もあり、洗面所もある。ないのは、台所だ。台所は、教会内にでかい食堂があるため、全員そこで食事をしている。

リルはシャワーをあびた後、ベットに倒れ込んだ。ふかふかのベツトに体を埋め、安堵の息を吐く。

ふ、と木でできた素朴な机を見る。そこには、光を反射して輝く銀の十字架クロスがあつた。エクソシストの証であるそれは、いつも身につけていなければならないものだ。

それを手にとり、リルは握りしめた。銀でつくられたそれに、ぬくもりなどあるはずもなく、手に感じる冷たさに、リルは安堵して微笑んだ。手から伝わる冷たさが気持ちいい。

リルはそのまま、いつのまにか規則正しい寝息を立てていた。

レインは、シャワー室から出ると、ベットに腰掛けた。肩にタオルをかけたまま、しっかり髪を拭いていないため、毛先から水が落ちる。それを目で追いながら、レインは髪をしっかりと拭いた。

人心地ついたら、そのまま後ろに倒れる。背中にあたるベットの柔らかさに、息を吐いた。

そのまま布団をひっぱって、レインは瞼を閉じようとしたが、ふと机の上に無造作においてある十字架を見る。手にとって、その心地よい冷たさに思わず微笑み、レインは意識を手放した。

翌朝。

リルは、未だ重たい瞼をこすり、ゆつくりとした動作で起きあがる。ぱちぱちと数回瞬きまばたをすると、脳が完全に覚醒した。リルは寝起きが良いほうなのだ。髪をとかし、服を着替える。腰に銃をさし、リルは部屋を勢いよく出た。そして自分の隣にあるレインの部屋に、ためらいもなく入る。

へたしたらリルより綺麗に整頓された部屋のすみにおいてあるベツトに、相棒はすやすやと寝息を立てていた。リルはやっぱり、と苦笑すると、レインの体を揺さぶる。

「レイナー、おきろー」

「んー・・・」

リルの手をふりほどくように布を深くかぶるレインに、リルはため息を一つ吐く。この相棒は昔から朝が弱いのだ。揺さぶる手に力を加え、リルはレインの耳元で怒鳴った。

「起きろっつ！」

「リル・・・声でかい・・・」
少々寝癖ではねた頭に、いまだ眠そうな顔したレインは、弱々しくリルにいった。片手で怒鳴られたほうの耳をおさえ、リルを少し睨

む。しかし、その目はまだ眠気で力がないため、リルは涼しい顔を
してられる。

「おきないあんたが悪いわよ」

しれ、とそう返す相棒に、レインは一つため息を吐くと、まだ寝ぼ
けている頭をむりやり覚醒するために洗面所へ向かう。

顔をタオルで拭き、リルを見る。前髪がまだ濡れていて、水が目を
かすって落ちた。リルはふう、と息を吐くと、苦笑して、レインの
肩にかけてあるタオルで、髪を拭いてやる。驚いたように、レイン
は目を見開いた。

「え・・・？」

「ぬれてたから。あんた、眠いといつもそうよね」

ほけほけと笑うリルに、レインはあっけにとられたような顔をした
後、笑った。

リルとレインは、今食堂への廊下を早足で歩いている。レインとリ
ルの部屋から食堂へは、けっこうの距離がある。こういう時、リル
は心底教会の広さを恨むのだ。

食堂の扉が見え、リルとレインは足を少しゆるめる。そして、やけ

に大きい扉を開けた。

そのまま、まっすぐリルは料理をつくっている顔見知りのおばさんに声をかけた。

「二つ」

その一言ですぐ意味がわかったのか、おばさんは苦笑して料理を作る手を進める。食事は皆一緒に、質素なものだ。

一方レインは、席確保をしていた。こちらに気づき、片手を軽くあげる。リルはそのまま、おばさんに手渡された食事をもって、レインの元に行く。机に食事　　パン二つと、スープの乗っているお盆をおいた。

「じゃ、いただきます」

行儀良く両手を合わせ、小さく頭を下げ、リルとレインは朝食を口に運んだ。

野菜のはいった、栄養のあるスープを一口飲み、パンを一切れ口に放り込む。甘い味が口に広がった。

教会のパンが、普通一般人が食べるものより少し甘い。この味がリルは好きだ。

その時、食堂に甲高い女の声が響いた。

「あら！誰かと思ったら、あのリルディウス・ローズさんじゃありませんか！どつりでどこかで見たことあるお顔だと思っていましたのよ」

嫌みっつたらしい言葉を吐いているのは、リルとレインと同年代くらいの少女だった。少し灰のかかった黄色は暗いイメージを感じさせず、こちら、といってもリルに対してだが、敵意むきだして見ているその瞳はエメラルドを宿していた。

「こんにちわ、メリセリタ・アシュルさん。どこかで、と言っていたけど、あなたとあったのはつい一昨日のことですよ？その頭は

飾りですか」

メリセリタ・アシュル。リルとレインと同年で、数少ない女エクスシストでもある。

いつもより、明らかに容赦のないリルの物言いに、隣で座っているレインは冷や汗をかく。メリセリタはその言葉にかちんときたのか、顔を真っ赤にそめて、リルの指さした。

「な・・・なんて言葉遣いな！？わたくしにむかって・・・！」

「これはこれは、失礼いたしました。アシュル様、私になにかご用があるのですか？なら手短にお願いします。これから任務がありますので」

かつて無いほど綺麗に微笑みながら、リルはメリセリタと対峙するかつこうとなつた。メリセリタは歯ぎしりをする、ほんと机を強くたたいた。近くにいた神官が眉を寄せるが、メリセリタとリル、レインをみて状況を理解したらしい、何食わぬ顔で食事を再開した。

「いいこと！？わたくしのレイン様が、あなたのせいで迷惑してるのよ！毎回毎回なにか壊して帰ってきて・・・！」

「あなたがレインレット様のことをどう想っているか、よぉーくわかりましたから、私にちょっかいかけないでください。それこそ迷惑です」

「な・・・なんですつてえ！？」

メリセリタは、レインのことが好きなのだ。だから必死にレインにアピールし、共にいたいと想うのは勝手だが、それに自分を巻き込まないでほしい、というのがリルの本音である。大本の原因であるレインは二人の間で、苦笑している。そもそもレインはメリセリタが自分に向けてくる想いさえ気づいていないのだ。

「メリセリタさん・・・このぐらいにしといてくださいますか？俺とリル、これから本当に任務なので・・・すみません・・・」

リル、その口調やめて。聞いてて寒気がする。すっごく」

最後の言葉はリルにだけ聞こえるように耳元で呟く。それに、リルは眉を寄せるとそっぽを向いた。その一連の様子に、メリセリタは悔しさに顔を赤くして、リルをにらみつける。

「それでは、もう二度と会わないように神に願っていますよ。アシユル様」

リルは爽やかな笑顔で刺々しい言葉を吐き捨て、残っていたパンとスープを食べると、その場を後にする。その背を、レインがあわてて追いかけた。

「リル・・・そのしゃべり方やめてっ・・・」

「なにをおっしゃいますの？レインレット様」

リルの敬語口調はその後、数十分ほど続いた。

「ルウ爺、いるー？」

教会の敷地内にある、古ぼけた棟の腐りかけた扉を、リルは数回ノックし、声を張り上げた。

返事がないのを承知で、リルは一つ息をはくと、扉に手をかけた。不愉快な音をたててあいた扉をしめて、リルは見慣れた室内を見渡す。

なにをどうしたら、ここまで、と思うほど、室内はひどい有様だ。まず、歩けるスペースがない。床にこれでもかと積み重なった紙たち。それには、リルには解読不可能な式が綴られてある。床に錯乱されたビーカーや試験管。机の上には、気味の悪い色をした液体のはいったビーカーが煙りをふいている。

「ルウ爺？」

それに怖じけず、リルは起用に紙どもの隙間にかろうじてある床を踏み、室内を散策する。

すると、ゆらりと漆黒が揺れた。

「おお・・・。リルディウスか・・・」

そこには、80代ぐらいの、老人がたっていた。もはや白しかない髪と髭は無造作に伸び、着ている服はよれよれで、薄汚れている。

この老人こそ、教会お抱えの天才科学者、ルウアビス・イーザである。

対悪魔銃を始めに開発したのが、彼の曾祖父らしい。イーザー族は皆、教会で対悪魔銃を開発している。彼も例外ではなく、その天才的な脳で、数々の銃を開発しているのだ。

リルにはただの食えない狸爺にしか見えないが。

「それで？あの銃はどうじゃったかの？」

「境界銃は良かったわよ。でも、もう一つのほうは駄目ね。撃ったときの反動で、隙ができるし、威力がありすぎて、また建物壊しちゃったわ」

軽いノリでそう言う少女に、老人は楽しげに笑った。

「そうか、そうか。それは良い」

「なにが良いんだ。この狸爺！」

額に青筋を浮かべながら、リルは低く呟く。

「あのねえ……。実験して、私があのかのクソ男……。じゃなかったクソ司教に怒られるのよ！？」

「じゃが、実験はやめんのだろう？」

「……。そりゃあ、それで戦力になるし……」

気まずそうにそつばをむくリルに、ルウアビスは優しげな瞳を向ける。

「でも……。あの、クソ司教と警官、頭ごなしに怒鳴って」

「やつぱりここにいた」

リルの声に被さって、青年の声がする。それに、リルは目に見えて固まった。おそろおそろ背後を振り返ると、そこには見慣れた相棒の姿が。ほ、と安堵の息をはいて、リルはレインに向き直る。

「よかったあ……。あいつかと思った。まったく、脅かさないでよ。レイン」

「なんで俺は怒られてるのかな？……。まあいいや。リル、そろそろ任務いくよ」

レインは苦笑して、リルを促した。リルはそれにうなずき、ルウアビスのほうを見る。

「今日はなにか新作ある？」

「おお・・・あるぞ。ほれ」

リルは実験した試作品を机の上において、ルウアビスに問うた。ルウアビスはどこから出したのか、漆黒の銃をリルの手にのした。

「ん。じゃ、いつてくるわね」

「おお。いつてらっしゃい。リルデウス」

優しく微笑むルウアビスに笑い返し、リルとレインは棟から出て行く。

「本当に、似ているの・・・」

ルウアビスは小さい声でそう呟くと、リルとレインが先ほどまでいたところを見つめた。

リルとレインは、馬車に乗り込むと、任務資料を読み始めた。といってもレインは昨日のうちに目を通していたが。

「ルエルまで・・・40分くらいか」

リルは呟くと、背もたれにもたれかかった。そして、そのまま船をこぎはじめる。眠そうに目をこするリルに、レインは苦笑すると、寝てもいいよ、と言った。

「・・・ん・・・じゃ、ついたら起こして」

そう言うやいなや、リルは眠りの世界に入る。

規則正しい寝息をたてはじめたリルは、ずるり、とレインにもたれかかった。レインはそれに驚いたように目を見張ったが、次にはほほえみ、リルの柔らかい髪を撫でた。

肩を強く揺さぶられたような気がして、リルは重い瞼を開けた。そこには、見慣れた相棒の顔がある。

「リル？起きて、ついたよ」

「・・・ん・・・う・・・」

瞼をこすって、リルは起きあがった。だいぶ寝ていたのか、少々身体のありこちが痛い。

思わず眉を寄せるリルに、レインは苦笑して頭を撫でた。

馬車から降りると、ぬるい風が頬をかすめた。リルの長い髪が、風に遊ばれて翻る。

鬱陶しげに髪を後ろに払い、リルとレインは屋敷のチャイムを鳴らした。

門から顔を出したのは、小太りの中年男性だった。片手には白い

少し黄ばんだハンカチが握られていて、今もまだ、額にうっすらと汗が見える。瞳は頬の肉にかくされて、見えないのとは思うほど細く、身体にきちきちのタキシードを着ていた。

「ど・・・どちら様ですか？」

うわずったような、高い声が耳朶をうった。執事は手に握られているハンカチを無理矢理上着のポケットにつっこんで、笑った。ポケットから、だらしなくハンカチが頭を出している。

それに気づかぬ振りをして、レインは優しくに微笑んだ。

「アルディラルド教会のエクソシストです」

「きよっ・・・！？」

執事は細い目を見張って、リルとレインを交互に見つめる。そして、今度は見るからに青ざめ、頭を下げた。

「も・・・申し訳ございません！」

なぜか謝り、執事はリルとレインを屋敷の中に案内した。

屋敷の中は、さすが貴族とあって、清潔だった。埃ひとつない廊下を歩きながら、リルは歩く。

悪魔の気配はしない・・・

視線だけ左右に動かし、リルは意識を集中する。悪魔の気配を感じ取るのは、レインよりもリルのほうが上のため、レインはもっぱら情報集めをしている。今も、執事になにか質問しているようだ。

「失礼します」

執事の、高い声が響いた。それと同時に扉が開き、そこには、もう五十代だが目を見張るほどの美男と美女がいた。

「では、失礼いたします」

執事は一礼すると、部屋から出て行った。リルとレインは、執事が部屋から出て行った直後、一礼する。

「はじめまして。アルディラルド教会エクソシストの、リルディウス・ローズです」

「同じく、レインレット・アルスです」

「はじめまして、よくぞ、ここまでおいでくださいました。感謝しますわ」

夫人はリルとレインに握手を求めるよう、手を伸ばしてきた。二人とも、慌てることなく手を握る。その手は、とても細く、頼りなかった。

「それでは、娘を紹介しよう。

入ってきなさい」

いままで一度も口を開かなかったローサルド卿がそう言うと、リルたちが入ってきた扉とは、反対にある扉が開いた。

そこから入ってきたのは、またもや目を見張るほど顔立ちの整った姉妹だった。

二人とも、母の血を濃く受け継いだのか、銀の髪に、翡翠の瞳をしている。姉であるう方は、だいたい20代後半ぐらいの年頃で、肌はもはや白を通り越して、青白かった。胸元が大きくさけているドレスに身を包んでいる。その姿が艶め^{なま}かしく映らないのは、儚げなその表情からだろう。

妹の方は、10代後半　　リルとレインと同年代ぐらいの少女だった。軽くウェーブがかかった銀の髪は肩に届くくらいまでしかなく、少しつり上がった翡翠の瞳に、肩がむき出しなドレスを着ている。

「これが、我が娘

」

「どういふことですか！？お父様！」

傲慢げに紹介しようとした父の言葉を遮って、妹の方　　レイ
チエルは怒鳴った。その頬は怒りで赤く染められている。

「どうして、エクソシストがここにいるの！？嫌よっ！嫌嫌嫌嫌嫌
つつっ！」

髪を振り乱して、ヒステリックに叫ぶレイチエルに、リルとレインは呆然とした。すると、レイチエルの隣にたっていた姉、エリザベ

スが顔をよりいつそう蒼くした。

「レイチエル！そんなこと

「お姉様は黙ってて！」

「レイチエル！おやめなさい！」

姉妹二人の言葉を遮ったのは、夫人だった。鋭い眼光で母に睨まれたレイチエルは、ひるむ。

「見苦しい！あなたは次期当主なのですよ！？もっと自覚をしなさい！」

「・・・っ・・・」

レイチエルは下唇をかみしめ、音を高くならして、その場から逃げるようにさっていった。バタンツと大きな音をたてて、扉が閉められる。

「・・・・・・」

部屋に、静寂が広がった。

リルとレインは気まずそうに顔を見合わせ、リルは小さくため息を吐いたのだった。

「すみません、エクソシスト様」

最初に沈黙を破ったのは、夫人だった。レイチエルのいた場所を見てため息をつき、リルとレインに深々と礼をする。

レインはそれに慌てる。

「そ、そんな！大丈夫ですよ、顔を上げてくださいっ」

「ありがとうございます」

夫人はレインの言葉を聞くやいなや、顔を上げる。その表情には、僅かながら苦渋の色が見えた。きつと、どこ生まれかもわからぬ人間になぜ、とても思っているのだろう。

「本当に申し訳ございません、エクソシスト様」

エリザベスは未だ顔を蒼白にしてリルとレインに何度も頭を下げた。さすがにリルが苦笑して、宥める。

「大丈夫ですよ。本当に。職業柄、慣れていますから」

むしろ、野太い男の声で怒鳴られるよりマシだ、とリルは続けようとしたが、やめた。

リルと隣では、レインもエリザベスを宥めている。エリザベスの顔は、蒼白で、今にも泣き出しそうだったからだ。

「と、とりあえず」

ローサルド卿は、場を持ち直すため、こほんと咳払いをした。

「こちらが、我が娘のエリザベス、さっきまでいたのが、レイチエルだ」

「わかりました。それで、私たちは、エリザベス様とレイチエル様の護衛をすればいいわけですね？」

リルが首を傾げて、微笑む。それに、ローサルド卿は肯いた。

「ああ。そうだ。宜しく頼むよ」

ローサルド卿は、皮肉っぽくそう言うと、近くにいたメイドに目配せした。メイドは一つ肯くと、リルとレインを誘^{いざな}う。

「こちらへ。お部屋へご案内いたしますわ」

メイドは愛想なく、無表情で、無機質な声でそう言うと、扉を開けた。リルとレインはその後に続く。

さつさと終わらせて帰ろう

リルは、今まで異常に深いため息をはくと、前で歩いているメイドの後ろ姿を見た。

部屋は、客人用なのか、広がった。リルとレインの部屋はつながっていて、同じ部屋だった。

それにレインは目を見開く。

「あ、あの……。これ、同室ですよね？」

「いえ、寝室は違います」

いや、同じだったら困ります！

レインは冷や汗をかいた。

「あの……。なんで……」

「ここしか、お客様用のお部屋は生憎ございませんので。旦那様も、まさかエクソシスト様に女の方もいらっしやるとは存知なく・・・」
メイドの言葉に、いままで沈黙を守っていたリルの眉がぴくりと反応する。少しリルのまとう雰囲気刺々しくなった。

レインは我知らず、また冷や汗をかいた。

「ローズ様には申し訳ありませんが・・・」

「いえ、大丈夫ですよ。平気です」

リルはにこりと愛想笑いを浮かべた。しかし、心なしか声が固い。

「それでは、ごゆっくり」

そう言うと、メイドは足音をたてずその場から去っていった。リルは平然としたままだが、レインは固まっている。

「・・・なにが、女の方もいらっしやるとはご存知なく、だっつーの！悪いか！？私の他に4人いるよ！」

リルは扉に向かってそう吐き捨てると、いまだ固まっているレインの足を踏みつけた。

「っ！？痛っ」

「いつまで固まってんの？シャワー室、一つしかないから、どっち先はいる？」

リルは腕をくんで、レインに問うた。レインはまた固まると、ふうと諦めたようにため息を吐く。

「リルが先で。女の子なんだから」

「？女男関係あるの？シャワーに？」

わからん、といった顔で首を傾げるリルに、レインは苦笑して促した。

「ほら、入るんでしょう？着替え終わったら、俺にいつてね。でも、ノックなしで部屋に入らないこと」

レインの注意に、リルはへいへいと気のない返事をして、シャワー

室に引つ込む。それを見届け、レインは今日何回目かのため息を吐いた。

リルはエクソシストの制服を乱暴に脱ぎ捨て、シャワー室に入る。シャワーを浴びながら、任務について考えていた。すると、ふと気になる発言があつた。

『あなたは次期当主なのですよ!』

夫人はこの言葉を、レイチエルに言つてなかったか？
女が当主になることは珍しいが、別に禁止されているわけではない。ローサルド家は今、女しか子供がいらないのだから。しかし、当主は本来、長子になるはずだ。なのに、なぜ次女であるレイチエルが次期当主と夫人に言われた？

「……?」

顎に手をあて、リルは考えた。

エリザベス様が当主ではないの？

なぜ、レイチエル様が？

エリザベス様になにか、当主になれない理由があるの？

「わからない……」

リルは、きゅ、と蛇口をしめて、タオルを手にとつた。

レインは別々にわかれた寝室のベットに寝そべりながら、資料を読んでいた。

そこに、ローサルド家の個人情報の記述がある。

「っ！？」

レインは起きあがって、その記述の、エリザベス・ローサルドの欄をもう一度読み直す。

「これは・・・」

「レインー、あがつたー」

リルは言われた通り数回ノックして、相棒の部屋の扉を開いた。すると、扉の目の前にレインが今まさに取っ手に手を伸ばしていたところだった。

「リルっ・・・」

レインは驚いたように目を丸くしたが、すぐに我に返って、リルに資料を突き出す。

「これ！」

「はあ？個人情報じゃない。これがどうかし・・・」

リルは記述を読んで、目を見張った。

「エリザベス様は・・・」

リルは資料を手に取り、食い入るように見つめた。

「どういうこと？エクソシストが恋人つくるなんて……。そりゃあ、禁止されてないけど・・・」

不可能に近いだろう。なにせ、死と隣り合わせの職業だ。

「明日、確かめるしかないね」

まあ、資料に嘘の記述なんてないだろうけど、とレインは真剣な瞳をリルに向けた。

「確かに、そうね」

リルは一つうなずき、資料を手にもったまま、自室に帰った。

エリザベスには、過去、エクソシストの恋人がいた、と資料には確かに綴られていた。

朝、暖かい日光が顔にあたり、思わず顔を背けた。リルは数分、ふかふかの布団の中にくるまっていたが、のそりと起きあがった。寢室からでると、広い居間が視界に広がった。見慣れない部屋に、リルは眉を寄せた。慣れない空気だ。

隣には、レインが寝ているのだろう。欠伸を一つして、洗面所に向かった。昨日のうちに、位置は覚えたため、難なく洗面所に行く。

そして、昨日の出来事を思い出した。

そうだった・・・

急いで顔を拭き、リルは寢室へと早足で向かった。勢いよく扉をあけ、ベッドのすぐ側にある机に視線を向ける。

机の上に無造作においてあった資料をつかんで、目的のページを探す。ページはすぐに見つかった。

何度文字の列を読み返しても、やはり昨日と同じ内容が綴られていた。

はあとため息をはき、リルは資料を閉じて、机に投げるようにおいた。

「あら、おはようございます。エクソシスト様」

朝、レインを叩き起こして、リルとレインは二人、夫人の部屋へと

向かった。

メイドに夫人が起きていると聞き、リルは遠慮がちに夫人の部屋の扉をノックすると、すぐに声は返ってきた。扉を開けると、夫人はにこりと微笑んだ。

「で、どうしましたの？」

いささか声音が堅い。リルはそれに気づかないふりをして、一言言った。

「エリザベス様に、昔恋人がいたんですね」

「・・・っ!？」

夫人は驚きに目を見開き、リルを凝視する。そして、睨んだ。

「どこで・・・それを？」

「依頼主、そしてその関係者の個人情報、教会が徹底的に調べるんですよ」

レインが隣から答え、リルが夫人を睨んだ。

「その恋人が、エクソシストだと書いてありましたが、本当ですか？」

「・・・教会から得た情報は、絶対でしょう？なんで確認したきたんですの？ええ、確かにそうでした、あの子の恋人はエクソシストです！」

悲鳴のような声で、夫人は言った。そして、もう聞かないでとか細かい声で言つと、しゃがみこむ。でも、聞かないわけにはいかなかった。

「アルフレッド・イレイサー」

リルの声が、室内に響く。

「彼は、あなたの娘と別れた後、死んでいます」

「し……ん……だ……?」

夫人は翡翠の瞳を見開き、リルを見た。その瞳は揺れていた。

「し、んだ……。死んだ?死んだのね!」

夫人は嬉しくてたまらないと言ったように、くるりと回った。

「よかった!よかった!……あいつのせいで!あいつのせいで、エリザベスは当主になれないのよ!代々長子が受け継いできたのに!あの子は、結婚もできない!なんにもできずに死んでいく運命だった!」

嬉しい、嬉しい、と夫人は若い娘のようにはしゃぐ。

「嗚呼……。でも、あの子は当主になれないわ。エリザベスのほうが当主になる頭脳はあるけど、レイチエルは私にそっくりなんだから……」

夫人はそう言って、ソファーに深く腰かけた。

「嬉しいお知らせをありがとうございますわ」

「まだ話は終わっていません」

満足感に浸っている夫人に、リルは冷たく帰した。

「今……。エリザベス様が当主になれない、と言っていましたけど、どういうことですか?」

「……。あの男が、エリザベスとは違う女の元へいったのが、原因ですわ。あの子は、精神が弱かった……。恋人に裏切られて、相当ショックだったのね」

まるで他人事かのように投げやりにそう言う夫人に、レインは訝しげな顔をした。

「その言い方だと、まるで他人事ですわね」

リルがそう皮肉げに言っていると、夫人はふん、と鼻をならした。

「だって、そうなんだもの」

ぴり、とリルは固まった。

リル・・・リルディウス・・・あんたが、あんたさえ、いなければ・・・！

あの人に私が愛されないのは、あんたのせいよ！

何のために、あんたを生んだと思ってるの！

「何のために、あの子を産んだと思ってるんです？当主にするためですわ。でも精神が弱くって・・・あげく、恋人つくって、逃げられるなんて。ローサルド家の恥だわ」

「・・・」

リルは震える手を、もう一方の手で強くつかんだ。

レインはそれに気づき、今すぐ相棒の両耳を塞いでやりたい、という心境にかられた。

「逃げられたショックで、子供は産めないのよ？レイチエルは万が一の保険だったけれど。よかったわ、役に立って」

リズディア様は、いとも簡単に解けた問題よ！早くやりなさい！早く！

『やめて、お母様。できない、わたしにはできないよ・・・』

なんて役立たずなの！あんたなんかできたから、・・・できたから、私は追い出されたのよ！

あんたがいるから、私はあの人に愛されてもらえなかった！

ごめんなさい、ごめんなさい

でも、ねえ、わたしはお母様に愛されたかった

「・・・もう、結構です。ありがとうございました」

リルはうつむき、そう言うとその場を逃げるように去っていった。
レインも後を追いつ、夫人はまだ落ち着いたのか、ソファーにもたれ
かかった。

「リル」

早足で廊下に行くリルの肩を、レインがつかんだ。リルは足を止めた。
いまだ、手が震えている。

「なさけないわね・・・、本当に」

もう、克服したはずなのに

「ごめんね、レイン」

「いいよ、リルは悪くない」

レインは首を左右に振り、リルの肩を強くつかんだ。

リルはそこでようやく顔を上げる。その青の瞳は、色を無くしていた。

脳裏にちらつく、母の姿。

父に愛されなくて、それが悔しくて、悲しくて、発狂する母。

「リルは、リルだよ」

頭を優しく撫でられ、リルは瞳をいつぱいに見開いた。

「レイン・・・」

撫でる張本人の相棒の顔は、驚くほど穏やかだった。

「・・・ありがとう」

そう言って、リルは泣きそうな顔で微笑んだ。

「・・・・・・・・」

朝食。でかく、無駄に長いテーブルで、リルとレイン、夫人、ローサルド卿、エリザベス、レイチエルは黙々と朝食を口に運んでいた。特にリルとレインと夫人の間には、気まずい空気が流れている。夫人のま隣に座っているローサルド卿は顔を引きつらせている。エリザベスは、昨日のように顔が蒼い。

「・・・・・・・・」

また、沈黙が流れた。

リルとレインは同時に食べ終わり、立ち上がる。

「ごちそうさまでした。とてもおいしかったです」

リルとレインはそう言って、近くに控えていたメイドに微笑んだ。メイドはなにがおこったかわからない様子だったが、すぐにその顔はトマトかのように紅くなる。

「では、エリザベス様、レイチエル様、今日、なにかご用時はありますか？」

リルは丁寧な口調で、二人に問いかける。エリザベスは首を振った。

「いえ・・・特に、屋敷を出る用事はなにも・・・」

「私もないわ」

隣に座っていたレイチエルは、冷たくそう言う。そして、リルとレインを見て、口を開いた。

「あなたたち二人の中からどちらか私に付くなら、そっちが良いわね」

顎で示された先には、リルがいた。リルは瞳を見開いて、レイチエルを見つめる。

「は・・・？」

リルは、目の前に黙々と勉強をしている少女の顔を凝視していた。レイチエルはその視線に気づいているのか、いないのか、ただ綴られた文字を読み取り、問題を解いていつている。ちなみにその問題はリルやレインだったら、ものの数秒で解けるであろう問題だ。

「……なによ」

レイチエルは不機嫌そうな面持ちで、リルを睨んだ。睨まれたリルは眉を寄せた。睨みたいのはこつちだ、と心の中で悪態をつき、表面上は爽やかに微笑んでみせる。

「僭越ながら、エリザベス様、その解、間違っていますよ」

「あ……」

間違いに気づき、レイチエルは己の失態に赤面する。そして慌ててそこを直した。

「……で、本題に入りますが」

「さっきのは本題じゃ、なかったわけね」

「それはまあ、どうでもいいとして。あの、レイチエル様、なんで私をご指名されたのですか？」

レイチエルはリルの問いに、言葉を詰まらせた。視線をリルからはずし、そっぽをむく。

「……あなたが、女だからよ」

「はい？」

リルは今度こそ聞き返した。自分でも素っ頓狂な声だと自覚しているが、そう言うしかない。

「女、だから？」

「どうせ、あんたらは、姉様の……その……」

「恋人ですか？」

「っ……そうよ！」

レイチエルは憎悪のこもった顔をして、リルを見た。

「あの男……！許せないのよ……だから……」

「同じ男でエクソシストであるあいつを敵視しているってわけですね」

レイチエルの言葉を遮り、リルは冷淡な声で言った。

レイチエルはリルのその反応に少し怖じ気づいたが、すぐに立ち直る。

「そうよ！悪いの！？あの男のせいで……」

「自分になりたいくない当主にならないといけない？」

「っ」

リルはレイチエルの言葉の先を口に出した。そして、嘲笑を浮かべる。

「確かに、そうですね。アルフレッド・イレイサーのせいで、エリザベス様は子供を産めない。そして、必然的にあなたが当主にならないといけない……でも」

リルはそこで区切り、レイチエルを睨んだ。

「だからといって、レインを敵視している理由には、ありません」

「なっ……！？あなたも、女だからわかるでしょう！？あの男は」

「

「確かに、最低だと思いましたよ、話を聞いたら」

リルはそう言うと、言葉が続けた。

「でも、イレイサーとレインは、関係ないですよ？変に敵視するの、やめてくださいません？居づらくなるので」

リルはそう言い切り、微笑んだ。レイチエルは口をぱくぱくと開け閉めして、顔を紅くする。

「あんだ

」

「ほら、さつさと勉強してくださいよ」

リルの言葉に、レイチエルはは、となり、時計を見る。そして、勉強は再開された。

エリザベスは、屋敷の庭で椅子に座り読書をしていた。その隣には、レインが立っていた。二人の間に会話はなく、時折レインが困ったように辺りを見回しているだけである。

ち・・・沈黙が痛い・・・！

レインは冷や汗をかきながら、エリザベスを見た。見れば見るほど美人である。作り物のように整った顔、風に揺れる銀の髪は、まるで月のようだ。

エリザベスは表情を一つも変えず、本を読んでいた。音は、ページをめくる時だけ、二人の耳朵をうつ。

レインは昨夜のエリザベスの恋人について知り、なぜレイチエルがあれほどこちらを嫌っているのか予想できた。そして、今日のあの態度から、その予想は真実になる。

レインはなぜエリザベスがこちらを嫌わないのか不思議だ。嫌って

ほしいわけではもちろんないのだが、レイチエルがあれほど激昂していて、なぜ当の本人が平然と　　むしろ、レイチエルの態度について申し訳ないという目線でこちらを見る？
レインはまた、エリザベスを見た。

本人の性格の問題もあるだろうが、それでも少しはこちらを敵視してもおかしくないはずである。

まあ・・・嫌われてたら、仕事し難いし。いいか
そうしよう、と自分で納得して、レインはため息を吐いた。

憎い、憎い

なんで？なんでわたくしでは駄目なの？

嗚呼・・・わたくしは誰よりも綺麗よ、綺麗。だから・・・ねえ？

早くわたくしの元へ、戻ってきて

アルフレッド・・・

「レイチエル、・・・それに、エクソシスト様。すこし、お話がありますの」

夕食をしている時に、エリザベスが遠慮がちにそう言った。驚きに目を見張るリルとレインだが、すぐに立ち直り、「わかりました」と応える。レイチエルは小首を傾げたが、すぐに快い返事を返した。

「それじゃあ、食べ終わりましたら、庭に行きましょう」

エリザベスは、花が咲くように微笑んだ。

「それで、話というのは、なんなんですか？姉様」

レイチエルは怪訝そうな顔をして、エリザベスを見る。二人の後ろには、リルとレインがいる。

エリザベスは、徐にリルとレインを振り返り、頭を下げた。

「レイチエルを、お願いします」

「は・・・？」

レインが間の抜けた声で聞き返す。リルは、険しい顔でエリザベスを見ていた。

「ごめんね・・・、ほんとは・・・連れてくるつもり、なかったのだけれど・・・」

エリザベスの声は、どんどん途切れ途切れになり、そして、低い、男の声になっていく。

エメラルドの瞳から、涙がこぼれた。

「ごめんね．．ごめんなさい．．．もう

エリザベスは大きく仰け反る。瞳は見開かれて、口が小さく開いていた。瞬間、身体から禍々しい力が放出される。

「姉様！？」

レイチェルが血相を変えて、姉にすがりつくこうとするが、リルがその腕を引っ張った。

「なにをするの!？」

「下がって！殺されるわよ！」

リルは銃先をエリザベスにあてたまま、レインに目配せをする。レインは肯くと、レイチエルを促した。

「レイチエル様……」

「触らないで！」

レインの手をレイチエルが跳ね返す。

「あ・・・」

予想通りの拒絶にレインは苦笑するしかなかった。が、レイチエルが一瞬泣きそうな顔をする。

「いっ・めい」

レイチェルはうつむき、レインに謝罪しようと口を開いた。が。

[illegible]

夜空に、男の笑い声が響く。それを発しているのは、間違いなく、エリザベスだった。

「ねえ……さま……？」

レイチエルは、信じられないといった瞳で、姉を見つめる。エリザ

ベスは瞳を見開き、狂ったように笑っている。

「く・・・もう、手遅れか・・・」

レインが眉をよせ、低く呟く。エリザベスの爪は黒く変色していて、長くなっている。そして翡翠だった瞳は血のような紅に変わっていた。

「悪魔・・・」

リルはそう言い、銃を構え直す。エリザベス いや、エリザベスだったものは、まだ狂ったように笑っていた。

「とんだ茶番だったなあ！女あ！」

悪魔は自身の体をかき抱くように両手を交差させた。

「嗚呼・・・お前と契約して、実に楽しかったよ。一人の愚かな男のためにこの手を紅く染めた！十分願いを叶えてやったよなあ？ほうら・・・あの女を殺せば・・・」

悪魔はその紅い穢れた瞳で、レイチエルを見据えた。口が裂けるように弧を描く。

「お前の望んだ、一番良い女になれる」

そう言うやいなや、悪魔の姿が消えた。いや、早すぎて見えなかった。

「レイチエル!？」

リルの絶叫がこだました。

レイチエルは瞳を堅く閉じ、衝撃を待つしかない。しかし、その衝撃はいつまでたってもこなかった。

「・・・あ・・・?」

レイチエルが、おそろおそろ目を開ける。すると、そこには黒い布が広がっていた。

それが、リルとレインがきているエクソシストの装束だと気づき、顔を上げると、銀の十字架が月光で鈍く煌めいていた。

さらに視線を巡らせると、紫の色を宿す瞳と目があった。

「レインっ！」

次に、リルの声が耳朵をうつ。レインの左肩から、なにか、黒いものが飛び出しているのが見える。その黒いものから、綺麗な紅い液体がしたたり落ち、地面に落ちて斑を描く。まだら

「あ、んた・・・なんで・・・」

レイチエルが震える手を肩に伸ばす。肩に貫通しているものが、悪魔の爪だとその時気づいた。

「大丈夫ですか？レイチエル様」

レインは自分の傷など気にもとめず、レイチエルに聞く。レイチエルは呆然とレインを見た。

こいつ・・・頭大丈夫なの？

自身をあれほど毛嫌いしていた人間を、身体をはって護り、あまつさえ心配までするとは。

「レイン、少ししゃがみなさい！」

リルと声と同時に、レインが素早くしゃがむ。突如、銃声が響いた。弾は悪魔に当たった瞬間、爆発する。

「・・・　っ!？」

悪魔が飛び退き、距離をとった。

「何事ですか!？」

続いて、夫人とローサルド卿が早足でこちらに向かってきた。エリザベスを見て、二人は息をとめる。

「悪魔・・・」

ローサルド卿が呟き、夫人が癩癧をあげた。

「なんなんですか!？あの化け物は!」

悪魔、嫌、エリザベスの身体がぴくりと痙攣した。

「はやく退治しなさい！エクソシスト!」

「・・・っ」

リルが眉間にしわを寄せて、夫人の頬を叩いた。乾いた音が響く。

「・・・それを仕事にしているのは、私たちだけど、・・・」

「リルはちらり、と悪魔を見た。」

悪魔は両手で顔を覆い、涙を流している。

「ぐ・・・あああ・・・や、めろ！クソ女あ・・・！」

悪魔は左右に首を振っている。瞳が、紅くなったり、翡翠に戻ったりを繰り返す中、必死に藻掻いている。

「あああああああ！」

悪魔の絶叫が轟く。レインが辛そうに顔を歪めた。

「自分の子を・・・道具としか見ていないあんたは最低よ」

リルは夫人を睨み、そして悪魔に銃先を向けた。

悪魔と銃先の間に、レイチエルが滑り込む。

「・・・！？」

リルが驚いたように目を丸くする。

「まって！・・・お願い、まって・・・」

懇願するようにレイチエルはリルに頭をさげ、悪魔になりはてたエリザベスを振り返る。

「姉様・・・」

必死に藻掻いている姉の姿に、レイチエルは苦しそうな顔をした。

「姉様・・・辛かったよね・・・」

レイチエルは腕を伸ばし、エリザベスをかき抱いた。自分より頭一つ分だけ姉を、背伸びして抱く。

「ごめん・・・ごめんなさい・・・」

悪魔の言葉で、レイチエルは悟った。

姉は、恋人に裏切られた。それも、この街でエリザベスとレイチエルの次に美しいとされている女とアルフレッドは恋人同士になったのだ。一番はじめの被害者は、その女だった。

ただ、アルフレッドに振り向いてほしい一心で、美女と噂される女を殺していった。

「レ・・・チエ・・・ル・・・」

エリザベスの声が、レイチエルの耳朵をうつた。が、次の瞬間、突き放される。

「・・・ご・・・めんね・・・でも・・・もう、駄目みたい・・・」

エリザベスは荒い呼吸を繰り返しながらも、レイチエルに微笑んだ。
「姉様！」

リルはレイチエルの身体をかきだき、止める。

「まって！今いくと・・・今度こそ殺されるわよ！」

「それでもいいわ！離して！」

「離すわけないでしょう！？私はあんたをエリザベス様に任されたんだから！」

レイチエルは顔をあげた。リルは、険しい顔をして、エリザベスを見ている。

「普通、悪魔と契約したら、そりゃあはじめは自身の意識があるでしょうけど、変ね・・・、エリザベス様はいまでも、意識があつた・・・、それに、悪魔のほうも・・・」

今までとなにか、違う

リルは眉間にしわをよせ、レイチエルを相棒に任せる。

「レイチエルは任せたわよ。私は・・・」

リルはレインの顔を見て、すぐそらす。

「悪魔を退治する」

「リル・・・」

レインはレイチエルの腕をつかみ、離さないようにしながら、リルの青の瞳を見つめた。返ってきたのは苦笑だった。

そしてリルはレイチエルを見て、悲しそうな顔をする。

「・・・ごめんね」

「っ・・・!？」

レイチエルはレインの腕の中で藻掻きながら、泣きそうな顔をしてリルを見つめた。そして、俯く。

嗚呼、こいつは・・・

姉さんを、解放してくれるんだ・・・

それは、殺すと同じことだ。でも、なぜか、憎しみなんてわいてこなかった。

「主神ゼウスの名のもとに、悪の禍々しき魂を救済します！」
闇に銃声が響いた。

リルのうつた弾が、エリザベスの胸を打ち抜いた。

エリザベスの姿が、元の、美しいもの変わる。見開かれた瞳は綺麗な翡翠だった。

「・・・ありがとう・・・」

耳に心地よい、女の声が耳朶をうつ。それは、一番穏やかな声だった。エリザベスの身体は砂色になり、闇に四散する。

「・・・」

レイチエルは、もう緩くなったレインの腕からぬけ、エリザベスのいた場所に座り込む。そこには、エリザベスの着ていたドレスだけが、無造作に落ちていた。

「・・・姉様は・・・」

レイチエルの、冷淡な声が響いた。

「本当に、アルフレッドを愛していたのね」

自分とは違う女に走った男を。エクソシストであり、いつ死んでもおかしくなかった男を。

彼女はただ、ただ愛していた。

「・・・そう、ですね・・・」

リルとレインは、レイチエルの隣までいき、瞳を閉じた。

一番はじめの被害者が、エリザベスの次のアルフレッドの恋人だった。

エリザベスは、恋人に裏切られ、寝取った女を恨んだ。なぜ自分じやないのか、なぜ駄目なのか、自分のほうが美しいのに、そういった感情が、悪魔につけ込まれることとなる。

エリザベスは寝取った女を殺し、自分が一番美しいのだとわからせるために、美女と噂される女を次々と殺していったのだ。

「・・・ふう・・・」

リルはため息をつき、大きくのびをした。報告書を書いていた手をとめ、レインが振り向く。

「どうしたの？」

「なんでもない」

レインは小首をかしげ、まだリルを見ている。その視線が気まずくて、リルは背を向いた。

「なにか、あった？」

「・・・」

リルは、ベットに横たわる。レインに背を向けた形のまま、リルは口を開いた。

「別に、なんでもないわ・・・」 ただ・・・」

夫人は、エリザベスが死んでも泣かなかった。もともとレイチエルしか子がいなかったかのように、今、振る舞っている。

リルとレインは、今日、この屋敷を出る予定だ。

悪魔を退治して、2日たった。警察と教会に連絡したりと忙しかった2日に、おもわず黄昏れる。

レイチエルはあの夜から、会話をしていない。エリザベスが死んでから、レイチエルは必要以上しゃべらなくなった。ローサルド卿は、

いまだに真実を受け入れないでいるようだ。

それも当然だろう。まさか連続殺人事件の犯人が我が娘とは思えない。

「・・・私、貴族が嫌いよ。大嫌い」

「・・・そうだね」

レインの悲しそうな声に、リルはシーツを握りしめる。

「自分勝手に、傲慢な貴族なんて、大嫌いよ」
だから、とリルは続ける。

「私は、自分自身も、大嫌い」

シーツを掴む手に力を強く入れた。

「・・・リルは違うよ」

頭に、ぱんとぬくもりを感じた。それがレインの手だと知り、リルは不覚にも泣きそうになる。

「・・・ごめん」

リルはそう呟き、起きあがった。

「それでは、お世話になりました」

レインとリルは、屋敷の門の前で夫人とローサルド卿、そしてレイチエルに頭を下げた。夫人はにこりとほほえみ、手をふる。

「いえ、そんな。こちらこそ、化け物を退治してくださって、とても感謝しておりますわ」

「……ありがとうございます」

夫人の言葉に、その場のほぼ全員が反応した。リルは怒りを押し殺した声で返事をし、馬車に乗り込む。その時。

「ごめんなさい！」

後ろから、少女の声がした。

振り返ると、レイチエルが顔を紅くしていた。

「……その……失礼な態度をとって、ごめんなさい……」

最後のあたりの声は小さく、聞こえないくらいだった。しかし、その言葉にレインもリルも頬が緩くなる。

「赦してあげる」

リルはそういつて、微笑んだ。

「あ……」

リルとレインが二人、乗り込んだ瞬間、馬車が走り出す。

レイチエルは、少し走り、そして叫んだ。

「ありがとう　　っ！」

届かないとしても、そう叫び、レイチエルは一筋の涙を流す。

「あなたたちのおかげで、姉様は救われたわ……本当に、ありがとう」

そう言つて、レイチエルは祈るように両手をあわせた。

愛しい人よ。どうか、どうか。
私の元に、還ってきて。

私が望んだのは、ただそれだけだから。

閑話 1

ルエルから帰ってきて、早3日たった。その間に低級悪魔退治の仕事があつたりしたが、それも難なくこなし、ようやく休暇らしい休暇がおりた時、嵐はやってきた。

「リルっー！久しぶり！もーお兄ちゃん心配で心配で・・・」

「・・・なんであんたがここに教会にいるんだどうでもいいけどさっさと離せ変態があああああっっ！」

その日、朝から少女の罵声が轟く。

「はあー、ようやく休める・・・」

リルは大きく伸びをして、そう呟いた。隣でレインが肯いている。

「そうだね・・・さすがに深夜連続悪魔退治は慣れない・・・」

こつた肩をほぐして、レインもため息を吐いている。ルエルから帰ってきて、1日休めるはずもなく、夜、任務にかり出されたのだ。

アルディラルド王国は確かに他の国よりエクソシスト数は多い。が、悪魔のほうが無断多いので、エクソシストは、ほぼ3日に1回と言

って良いほど任務をこなしているのだ。

「今日は一日寝ようかな・・・」

そうリルが呟いた時、足音が聞こえた。振り返ると、そこにはメリセリタが起立している。

「リルデウス・ローズさん！ルエルではなんとか建物を壊さなかったみたいじゃない？少しは成長するものなのね！愚か者って！」

「そうねえ・・・本当に良かったわ。けど毎回毎回私を見たら必ず話しかけてくるあなたはよっぽど暇なのね。アシユルさん」

「っ・・・そうね、確かにあなたなんか結構っている暇なんてなくてよ！これから任務があるの。失礼しますわ！」

「・・・その割には相棒がいないわね」

リルはぼそりと呟く。メリセリタは羞恥で顔を真っ赤にし、大股でその場を去ろうとした。その時だ。

「リルウウウウっ！」

甘ったるい男の声が、響いた。呼ばれた本人は聞き覚えのある声に思わず顔を引きつらせ、振り返る。すると、綺麗に手入れのされた庭から、こちらまで走ってくる、20歳頃の青年がいた。琥珀色の髪に、黄緑の瞳をした、顔の整った青年だ。その顔は満面の笑みで彩られている。

「リルっー！久しぶり！もーお兄ちゃん心配で心配で・・・」

「・・・なんであんたがここに教会にいるんだどうでもいいけどさっさと離せ変態があああああっ！」

リルは絶叫をあげ、こちらを力いっぱい抱きついてくる青年を蹴飛ばした。

「あれ、リルのお友達？」

感動の抱擁を堪能できず、悲しそうな顔をしていた青年が、ふとメリセリタに気づく。メリセリタはいきなり現れ、強敵に抱きついてきた不審な男を呆然と見つめていたが、我に返った。

「お友達なんかじゃありませんわ！というか、あなた、リルディウス・ローズのなんなんですよ！？」

「『ローズ』・・・」

青年は、リルの名字をきき、驚きと悲しみに染まった瞳をリルに向ける。リルは気まずそうに俯いていた。

「そうか・・・」

青年はそう呟いて、先ほどの表情は嘘かのようにほほえみ、リルの肩を自分側に引き寄せる。

「リルの恋人です」

「気持ち悪いっっ！冗談をそんな笑顔でさらっと言うなあああっっ！」

青年の言葉を聞いてリルは今度、鳩尾に拳を打ち込んだ。青年のうめき声が聞こえる。レインは複雑な気分で見、リルを慌てて止めた。

「リ・・・リル・・・！駄目だっつて！」

「だっつて、こいつが・・・！」

リルがまた怒鳴ろうとすると、レインが止める。青年はものの1分で起きあがり、爽やかな笑みを浮かべていた。

「駄目じゃないか・・・リル。女の子がこんなこと・・・」

「もーやだこの人本当気持ち悪い」

リルはげっそりとやつれ、黄昏れる。レインはそんなリルを慰めるように肩を叩いた。放置されていたメリセリタはさすがに我慢でき

なくなり、声を上げる。

「それで！本当にあなた何者なんですか！？」

「ああ」

そつえば、と青年はメリセリタにほほえみかけて、優雅に一礼した。

「初めまして。俺の名はリズディアス・オールウェイ。リルの兄だよ」

「オ・・・オールウェイって・・・」

メリセリタは顔を真っ青にして、一歩後ずさった。

「オールウェイ公爵・・・！？」

「そう」

朗らかに笑う青年の正体は、公爵のご子息だった。

「で・・・でも、リルディウス・ローズの兄って・・・」

名字が違う、とメリセリタは怪訝な顔をした。その言葉にリズは少し悲しそうな顔をし、レインは眉をよせる。

「この子の本当の名は、リルディウス・オールウェイなんだけどね・・・」

リズはどこか遠くを見つめるような顔をして、リルを見つめる。リルはリズに顔を背けたまま、握り拳をつくった。

「・・・私には、その名を名乗ることはできないわ・・・わかってるでしょう？私は家族になる資格なんてない！」

「でも母さんも父さんもお前を待ってるよ。娘だと、大切だと想ってる。それでもかい？」

「・・・っ・・・」

リルは言葉をつまらせ、そのまま走った。リズからともかく逃げたかった。

わかってる・・・父様も義母様も待っていてくれてるってわかってる・・・！

でも・・・

「私はあの人たちに愛される資格なんてない・・・！」

「なんなんですか？いきなり走って・・・」

メリセリタはリルの走っていった方向を見て、怪訝そうに呟いた。

レインは苦しそうな顔をして、俯いたままだ。リズはリルのいた場所を、悲しそうに見つめていた。

「家庭の事情ってやつだよ・・・。ごめんね、変な所見せちゃって。それじゃあ、俺はレインレット君と話しがあるから」

そう言って、リズはレインの腕をつかみ、歩き出した。

「レインレット君、君の部屋どこだっけ？」

「あ・・・今歩いている所とは逆方向です」

「久しぶりだね。背も伸びたんじゃない？」

レインの部屋の椅子に当然と座り、リズは朗らかに笑う。レインは苦笑した。

「そうですか？」

「そうだよ。・・・リルは、大丈夫？」

「大丈夫ですよ。元気です」

リズが心配げに問うと、レインはほほえみ、そう返した。その返答に、リズは安心したような顔になる。

「・・・で、一つ、聞きたいことが」

「はい？」

レインが小首を傾げると、その両肩をリズが掴んだ。

「リルに、手え出してないよな・・・？レイン」

低い声で、両肩を掴む手に力を込めるリズに、レインは真っ青になる。

「だ・・・出してません！出してません！安心してください！」

「ふうーん？ならいいけど」

ぱ、と手を離し、リズは顎に手をあてた。

「まあ、万が一リルに手え出そうもんなら、俺が即刻闇に葬ってやるが・・・」

「口調が素に戻ってますよ・・・リズさん。あと恐ろしいこと言わないでください」

顔を引きつらせて、レインは一歩足を引く。リズは恐ろしい笑みを浮かべていた。

「お前のことを信頼して、リルを任しているんだ。頑張って護ってくれ」

俺のぶんまで、とリズは微笑んだ。レインは目を丸くしていたが、微笑む。

「はい」

リルは息を切らすことなく、適当な所で走るのを止めた。周りを見渡すと、庭のはじだとわかる。周りには神官が一人もいなかった。リルはため息をはいて、腰をおろす。体育座りをして、膝に顔を埋めた。

「そういえば・・・」
リズはふと顔をあげ、窓から青空を見た。どこまでも続く青空に、リズは自然と顔を綻ばせる。
「リルと初めて会った日も、こんな空だったなあ・・・」

それは、遠い昔の出来事。

雲一つない青空だった日、その子と初めて会った。

その子は、綺麗な長い金の髪をし、青灰の瞳をした、顔立ちの整った子だった。でもその瞳はどこか濁っていて、その目に自分は映っていないんだ、と幼いながらもリズは理解していた。

「リルディウスっていうのよ。今日からあなたの妹になるの」

その子の隣で優しく微笑む母の言葉に、リズは大きく肯いた。

「よろしく！リルディウス！」

「・・・・・・・・」

リズが満面の笑みで手をのびし、握手を求めても、リルはただ空を見つめるだけで、なにも反応を返さなかった。

それに母がすこし悲しそうな顔をする。リズは小首をかしげて、妹である少女を見つめた。

4歳ぐらいだろうか。腕や足に、包帯が巻かれている。顔には擦り傷や切り傷が無数にあった。

「傷、大丈夫・・・？」

リズが顔に手を伸ばそうとする。が、その手は顔寸での所ではじき返された。

「・・・・・・・・さわらないで」

初めて、その子の声を聞いた。か細く、小さい声。幼い声はしかし、冷たさを宿していた。

少女はすこし顔を俯かせ、そのまま庭のほうへ走っていった。母は顔を俯かせ、肩を震わしている。リズはなにが起きたかわからない、といった顔で呆然としていた。

その日、結局リズはリルと会話ができなかった。庭にいたリルに何度話しかけても、リルはまったく相手にしなかった。

リルに割り当てられた部屋は、リズの隣に部屋だった。

リルの部屋の扉を数回ノックする。しかし、なにも返事がこなかった。思っていた通りだったので、リズはやっぱり、と少し悲しそうな顔をしたが、すぐ気を取り直して、扉をあけた。

「はいるよー」

そう言つて、リズは部屋にはいる。部屋の明かりはついていなかった。もう寝たのか、とリズはすこし驚く。ベットに近づいていく。

「あ・・・」

そこには、無垢な寝顔を見せる少女がいた。すうすうと規則正しい寝息をたてている妹を起こさないように見つめる。

「ん・・・」

寝返りをうつて、リルは眉をよせた。顔が歪む。

「リルデウス・・・？」

リズは心配になって、妹の名を呼ぶ。リルは首を横にふり、小さくなにか呟いた。

「・・・ご・・・め・・・なさ・・・い・・・」

「え・・・？」

リズは眉をよせ、リルの口に耳を近づける。

「ごめ・・・な・・・さい・・・かあ・・・さま・・・」

涙が頬を伝い落ちる。リルは悲しそうに顔を歪めて、なんともなんでしょうか？

「母様・・・」

リルは母になにかしたんだろうか、とリズは首を傾げた。

「いりません」

出された朝食をみて、リルは首をふった。

リズは不満そうな顔をする。

「なんで？おいしいのに」

「いりません」

リルは小さい声で、強い拒絶を見せる。母と父が困ったような顔をした。

「どうしたの？リル・・・」

「・・・すみませんでした」

母が心配げに聞くとリルは顔を俯かせて、そう呟き、そのまま部屋を飛び出した。

「リル・・・」

母の悲しそうな呟きが、部屋に木霊す。

「ねえ、母様」

「どうしたの？リズ・・・」

リズが母、リリアリズのドレスの裾を引っ張ると、リリアリズはあわててリズの目線にあわせるように屈んだ。

「リルディウスは、僕の本当の妹なの？」

その言葉に、リリアリズは表情を消した。

「・・・どうして、そんなこと聞くの？」

「だって・・・妹って、同じ父様と母様から生まれた下の女の子のことを言うんでしょ？」

リズは小首をかしげて、続ける。

「母様は、いつリルデウスをうんだの？」

リリアリズは苦しそうな顔をして、リズを抱きしめる。リリアリズの隣にいた父、レズストアはリズから顔を背け、呟くような声でいった。

「すまん・・・」

「謝るのは、アリアとリルに謝ってください」

リリアリズはリズを抱きしめながら、そう言う。レズストアは、また一言、すまん、と言った。

「お前にも・・・私は、お前とアリアを裏切ったんだ・・・」

「・・・もう・・・いいんです。悪いのは私なんだから・・・」
リリアリズはリズを抱きしめていた手をゆるめ、リズの頭をなでた。

「ごめんね・・・リズには、まだ言いたくなかったのだけれど・・・」

その言葉の次に続く話に、リズは愕然とした。

リルとリズは、異母兄妹だったのだ。

リズは、リリアリズとレズストアの子で、正妻から生まれた子。リルは、昔この屋敷にいたメイド、アリアとレズストアとの子だった。アリアとリリアリズは親友で、身分違いだとしても仲の良い間柄だったそうだ。

しかし、レズストアはアリアを愛していた。リリアリズが嫁ぐ前から、ずっと。アリアも、レズストアを愛していたらしい。しかし、

リリアリスが嫁ぎ、その関係はなくなったと思っていた。
でも、レズストアはまだアリアに未練があり、こういう結果が招かれた。

アリアが妊娠したと知り、リリアリスは怒りより悲しみが大きかった。自分のせいで、アリアは不幸になった、と。周りの使用人からの風当たりも強く、屋敷にいずらなくなったアリアを、二人は遠い土地に逃がした。

アリアは土地にうつされ、そして変わった。アリアはまだ、レズストアを愛していた。親友であるリリアリスを恨んだ。その矛先は、生まれた子にぶつけられた。暴行をされ続けてリルは育った。そして、アリアは死んだ。流行り病だった。残されたリルを、レズストアとリリアリスが引き取った。

「父様は、知ってたの？アリア様が・・・」

「・・・子に、暴力をふるっているとは知らなかった。近くの住民に聞いたんだ」

私を恨んでくれれば良かったのに、とレズストアは呟く。リリアリスは、リズを抱きしめた。

「あの子はなにも悪くなかったのに・・・、あの子は、私を恨んでいるでしょうね・・・」

あの子、とは、アリアかリルか。どちらかはリズにはわからなかった。

「リル」

「・・・そのなまえでよばないで」

庭でうずくまっっているリルに、リズは声をかけた。リルは低く呟いて、顔をあげる。その瞳は相変わらず濁っていた。

「・・・聞いたよ。君のこと」

「あ、そう・・・」

以外とあさっさり、リルは言う。

「それで、どうしたの？」

舌足らずな声で、リルは冷たく言った。リズはリルの隣に座る。

「僕が、にくい？」

「だいつきらいよ」

リズの問いに、リルはすぐ答えた。その答えに、リズはさすがに悲しくなるが、ぐとそれを飲み込んだ。

「君の母様と、父様の仲をひきさいた僕の母様は？」

「きらいじゃないわ。でも、あなたはきらいよ。リズディアス」

リルはき、とリズを睨んだ。

リズは首を傾げる。

「なんで？」

「・・・わたしは、あなたになれないから」

リルは空をみあげて、そう答えた。

「？どういうこと？」

「・・・かあさまは、あなたがほしかったのよ。とうさまにあいされたかったから」

自分より4つ年下の妹の言葉を、リズは理解できなかった。

「父様に？」

「そう。そうしたら、きつととうさまのそばにいけたから。わたしはいらないこなの」

「違うよ。いらなくない」

リルの言葉に、リズは首を振る。

「リルは、いらなくない」

「・・・どうして？」

リルはそこでようやく驚いたようにリズを見上げた。

「だって、君がきて、僕すっごく嬉しかったんだ。父様も、母様も一緒だよ」

「・・・うそ」

リルはうつむき、呟くように言う。

「うそよ。ぜったいうそ。わたしは知らないこだもの」

「それこそ嘘だよ！」

リズはリルの前に腰をおろし、その頬に両手をそえ、上を向かせる。

「リルは、いらぬ子なんかじゃない！」

その言葉にリルは瞳を丸くさせる。

「ははっようやく僕をみたね！リル」

リズは嬉しそうに笑って、リルの頬から自分の手はずず。リルは虚をつかれた顔をして、不満そうに眉間にしわを寄せる。

「・・・」

「はははっ」

その姿に、リズはまた笑った。

それが、この子との出会い

「はあ・・・」

リルは顔をあげ、身を起こした。さっきからずっと蹲っていたため、尻が痛い。リルは眉を寄せた。

蹲るんじゃないかった・・・

またため息を吐き、リルは自室に戻ろうと踵を返す。しかし、足が止まった。

リルがまさに行こうとした方向に、異母兄がいたからだ。爽やかな笑みを浮かべ、リズは片手をあげる。

「探した。リル」

リズはそう言うのと、まっすぐリルのほうへと行く。リルはぽかんとその様子を見ていたが、ようやく今の状況は飲み込めたく、眉をつり上げた。

「なんで、ここに？」

温度のない声で冷たく言うリルに、リズは傷ついたような顔をした。

「リルが心配だったからに決まってるだろう？」

「その言葉なら何回も聞いたわ」

リルが屋敷を飛び出すようにエクソシストになった3年、その間にリズや両親から幾度となく手紙が届いていた。しかしリルはそれに返事をほぼ書いていない。

1年に一回だけ、リルは返事をかいていた。

「リル、エクソシストをやめる気は、ないんだね？」

「ないわ」

リルは、きつぱりとそう返し、リズから視線をはずす。リズは首を傾げて、リルの腕を掴んだ。

「!？」

驚いたようにリルがリズを見上げると、リズは微笑んでいた。

「でも、定期的に家に帰ってこいよ。父さんも母さんも待ってるんだから」

「……」

リルはうつむき、なにも言わなかった。リズはあ、とため息をはいて、肩をすくめる。

「父さんなんて、毎日毎日蒼い顔してるぞー。母さんも、ほぼ毎日お前に手紙送ってるだろ？」

「でも……」

「絶対、帰ってこいよ」

リズはきはきとした声で、言う。

「お前の帰ってくる場所なんだから」

「……」

リルははまだ視線をリズに戻そうとしない。リズは不満げな顔をする。

「ねえ、リル」

「なによ」

リズはリルの腕を掴んだまま、離さない。

「リルは俺の前で笑うことって、あんまないよね。レインレットの前では普通に笑うのに」

「……」

気まずいように視線をわざとらしくそらすリルの肩をもつ片方の手で掴むリズ。

「笑ったら、この手を離してあげる」

「……こんのクソ兄貴……」

リルは引きつった顔をして、低く呟いた。リズはリルの言葉に、一瞬息を詰める。

兄、と言ってくれるのか……

自然と顔を綻ばせる兄に、リルは冷たく吐き捨てた。

「なににやついてるの？気持ち悪い」

「今日はここに泊まろうかなー」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ！」

リズの言葉にリルは土下座する勢いで謝る。リズは悲しそうな顔を
した。

「酷いなあ・・・リル・・・」

「・・・は・・・ははっ」

リズの言葉にリルは乾いた笑みを浮かべた。

「さあ、笑ったわよ！？さっさとその手を離して帰りなさい！」

「え？なに言ってるの？俺は手を離すといったけど帰るなんていっ
てないよ？」

「あ・・・」

リルは顔を引きつらせて、隣で朗らかに笑う兄の顔を殴りたい心境
に駆られた。

「で・・・結局リズさん帰るんですね」

「うんー。君たちあした仕事だしね」

リズは爽やかに微笑んで、仏頂面の妹に手をふった。

「じゃあ、また今度」

「今度はない・・・」

リルはリズを睨み、低く言う。レインは隣で苦笑した。

「まあまあ、リル」

「・・・最悪よ・・・せつかくの休日が・・・」

リルはやつれた顔をして、壁にもたれかかる。

なにせ今日はずっとリズに父と母の様子、最近あったことを延々と聞かされていたのだ。

「まったく・・・クソ兄貴は・・・」

そう言いながらも、リルの顔は穏やかだ。

レインは苦笑して、リルの頭にはん、と手を置く。

「また、来てくれるといいねー」

「冗談じゃないわよ」

リルとレインの休日は、ある意味仕事よりつかれたものとなった。

3（後書き）

閑話リルの家庭内事情暴露編、完結しました。

次回からは第二章にはいります。そして第二章が終わったら、ようやく序章が終わるという……。第二部からが本当の本編というかなんというか……。

表の神話

昔、天使と神様が住む高原での出来事でした。

主神の妻に、双子の赤子が生まれたのです。

その名を、『セルフィーナ』と『ゼウス』といました。

そして時はたち、次の主神を決める時がやってきました。

高原のほとんどの者は、セルフィーナに決まる、そう思っていました。

セルフィーナは幼い頃から誰もが認める力を持っていたからです。

天使のような美しさを持ち、清らかな心をもっていたセルフィーナは誰にも好かれました。

弟であるゼウスは、いつもセルフィーナの後ろをついてまわり、とても仲の良い双子でした。

容貌は似て無くても、ゼウスとセルフィーナはお互い、たった一柱の片割れだったのです。

ゼウスも、セルフィーナには劣るものの、とても強い力を持っていました。

誰もがこの二柱を認めていたのです。

しかし、事件が起きました。

セルフィーナが、自分が主神になるために弟であるゼウスを殺そう

としたのです。

ゼウスはそれを見事撃退し、セルフィーナを高原で一番深い穴に落とし、封印の岩をその上において、セルフィーナを永遠にそこに閉じこめてしまいました。

主神は、ゼウスに決まりました。

嫉妬に怒ったセルフィーナは、残った力を使い、悪魔を造りました。

セルフィーナは『罪に穢れた女神』と言われ、今もまだ、悪魔を造り続けています。

これが、表の神話。

表の神話（後書き）

一部修正しました。

第二章 1

「ここか・・・」

吐息のような声が、闇に響いた。

風に揺れる金の髪。漆黒のマントが翻る。

リルは、ひとつ深いため息を吐いた。

「ぼつろぼろじゃない・・・」

「本当だね・・・」

彼女の相棒、レインも思わず肯くほど、二人の前に建っている教会は寂れていた。

この教会は、異教徒の教会で、数百年前、国王の命によって滅ぼされたものである。今は世界全国が主神、ゼウスを崇めている。

「さてと・・・」

リルはフードをとり、前に進んだ。

「はあ？」

室内に、少女の声が響いた。

五月蠅そうに顔を歪めて、リゼルグは口を開く。

「だから、とある教会に潜んでいる悪魔を倒してこい、といってるんだ」

「……だから、なんでその悪魔を追っていたエクソシストが退治しないのよ」

「負傷した」

「……はあ……」

くっそ、と悪態について、リルは前髪を掻き上げた。レインは任務の資料を読んでいる。

「それで？その教会は？」

「これだ」

リゼルグは写真を封筒から取り出し、リルに手渡す。それに写っていたのは、もう使われていないだろう、寂れた教会だった。壁には蔦が伝い、庭には雑草が好き勝手に生えている。

「異教徒の教会だったものだ。そこに、悪魔が潜んでいる」

扉は耳障りな音をたてて開いた。当然中は暗く、明かりはない。割れていて、もはや色の区別もできないステンドグラスを通しての月光が、唯一の明かりだ。

リルとレインは足音をたてず、教会内に足を踏み込む。

月光が足下を照らす。リルは注意深く周りに気を配りながら、前に進んだ。すると、広場に出た。

円形の広場にはステンドグラスが連なった壁に、天井には、神話の一部であるう絵がある。

そして広場の中央には

。

「え・・・・・・・・？」

見慣れぬ女神の像が、月光に照らされていた。

「キシヤアアアアアアッッ！」

甲高い、悲鳴のような声と共に、レインは後ろを振り返った。すんでの所で結界銃の引き金をひき、攻撃を耐える。

「悪魔・・・！」

レインは低く呟き、もう片方の手で退治用銃を構える。そして、躊躇なく引き金を引いた。

「ガアアアアアアアアアアアッッ！」

悪魔の断末魔が、広場に響いた。リルは腰からルウ爺から受け取った試作品銃をとり、放つ。

瞬間、爆音が鼓膜をつんざいた。

弾は悪魔に命中していて、悪魔の腹には大きな穴が開いていた。

悪魔退治専門銃は、契約期間の短い悪魔 まだ助かる人間の身体に傷をつけない。しかし、契約期間の長い、もう助からない人間の身体は、その攻撃相応の傷がつく。もちろん、血もでるし、姿は人間だ。

悪魔は年若い男だった。無性髭を生やした顔は驚愕の色にそまっていて、口からはとどめなく紅い液体がこぼれ落ちている。薄いシャツは乾いた血と、新たに、男自身の血が混じり合って、斑を描いていた。

「ぐ……ああ……」

口から悲痛の聲が迸る。リルとレインはそれを、無表情で見つめていた。

悪魔はぎこちない動きで手を前に突き出すように動かす。しかしその手は前に出した瞬間、崩れた。地面に、腕だった砂が次ぎ次ぎと流れる。

「………任務終了」

リルの声は小さかったが、それでも妙に広場に響いた。

「そうだね……」

こんなことは、ほぼ毎日ある。悪魔と契約した人間はほとんどの確率で死んでいる。それは、教会が悪魔と人間の契約に追いついていないからだ。

エクソシストの仕事は、悪魔退治。しかし、世間から、ある一部の人間には『人殺し』と言われているのだ。

それは、いくら悪魔だからといっても姿は人間なのに躊躇なく銃をむけ、うつからだ。悲鳴を聞いても、何度でもうつ。悪魔が死ぬまで。

「主神ゼウスの名のもとに、悪の禍々しき魂を救済します……」

リルはそう言うと、その場に崩れるようにして膝をつき、悪魔だった、人間だった砂に祈るように手をあわせ、瞳を閉じた。レインも、同じように手を合わせる。

「どうか……安らかに」

しばらくそうして沈黙が広がっていた。

リルは目を見開き、顔をあげる。それと同時にレインが銃先を女神の像の真正面にあるステンドグラスに向けていた。

「誰……？」

リルが、ステンドグラスを睨む。逆光で顔は見えないが、シルエットからしてリルたちより年上の男だろう。音もたてずにその男は飛び降りる。

「ようやく、逢えた……。セルフィーナ……」

男の声が、響く。

リルは目を見開いた。

『セルフィーナ』

その名を自分は、いや、教会関係者や神話に詳しい人物は知っているだろう。

罪を負った女神の名

「これ、は……」

レインもリルも、思わず目を見開いた。悪魔に氣をとられて気づかなかったが、天井に描かれている絵は　セルフィーナが閉じこめられている絵だった。そして、中央にたっているこの女神の像は。

「セルフィーナ神……？」

リルは掠れた声で言う。

だって、ありえない

その像には確かにセルフイーナ神と名が刻まれていた。が、その像の顔は、間違いない。古びていてもわかる。レインは息をつまらせた。

「
リル？」

その像の顔は間違はなく、リルディウス・ローズだった。

「ようやく、気づいたのか」

男の呆れたような声が聞こえた。リルとレインはまだ状況が飲み込めず、茫然としている。

そのため、男がすぐ近くまで迫ってきていることに気づかなかった。「っ！？」

リルとレインはほぼ同時に後ずさる。男の顔がこのころになってよ

「でも、近いうちに、必ずわかるぜ。意味が」

その言葉を残して、彼は消えた。

寂れた教会には、状況が飲み込めない二人が残された。

月光は、女神を照らし続ける。

これが、これからおこる事すべての、始まりだった。

2 (後書き)

ようやく、物語が動き始めました。

リルとレインはその日の夜、急ぎ足で教会に帰った。

異教徒の教会は王都のはずれにあった。教会とだいぶ距離があるが、エクソシストの足だと、すぐつく。

屋根の上を転々と走りながら、リルはアーシャルに会ってからやまない頭痛を耐えていた。

セルフィーナ

「・・・・・・っ」

リルは顔をゆがめ、首を左右にふり、前だけを向くように顎をあげた。

「それで、その男は？」

リゼルグの問いに、レインは首を左右に振る。

「すみません……」

「そうか」

リゼルグは額に手をあて、なにか悩むような顔をしていたが、顔をあげた。

「わかった。もう部屋に戻って良いぞ二人とも」

「はい」

レインだけ返事をして、リルは一礼しただけで無言で部屋に戻る。

二人は軽いあいさつをして、それぞれの部屋に戻った。

リルはベットに倒れ込み、瞳を閉じる。

まるでこわれたビデオのように、白黒の世界が、目に広がった。しかしそれは雑音まじりで、しかも途中とぎれとぎれで、よくわからない。

セフィー……

愛してる、愛してる

セルフイーナ、愛してる

ただ、呪文のようにその言葉が脳裏に響いた。
リルはなぜかあふれ出す涙に戸惑う。

愛していた

愛してた

でも

でも

私、は

そこで世界は終わる。

それ以上は見では駄目だとサイレンが頭に鳴り響く。

それは、決して忘れてはいけない、記憶。

それでも『私』は、どうしても、どうしても、消したかった。

「い……や……だっ……」

思い出したくない、思い出したくない。

涙が次々と頬を伝い、シーツを濡らした。

□

□

ええ、私も愛してるわ

そう、言いたかったのに。

第三章 1

リルは、ベットに寝ころんだまま、天井を見上げていた。顔はいつもより白く、目は赤くなっている。昨日から泣き通しで、一睡もしていなかったのだ。

ただ空を見つめたままリルはいた。

「・・・・・・・・」

脳内に、映像が駆けめぐることはない。しかし、酷く頭が痛かった。

思い出したいくない・・・

思い出したいくない、だから封じた。封じた、なのに。

『私』は思い出そうとしている・・・？

耳鳴りがした。

顔を歪めて、リルは両耳を強く押さえる。心臓の音がやけに大きく聞こえた。

いやだいやだいやだ！

だって、この記憶は・・・・・・・・っ！

「・・・・・・・・はっ・・・・・・・・」

荒い呼吸を整え、リルはゆっくりと起きあがる。乱れた髪が少し視界を遮る。

鬱陶しげに髪を払いのけ、リルは洗面所へ足を急がせた。

「おはよう、リル・・・」

リルが洗面所を出ると同時に、レインが自室から出てきた。視線があい、レインは微笑んでいつもどおりあいさつをする。リルは同じくいつも通り答えようとした。

「ええ、おはよう。今日は早いね・・・」

しかし、掠れた声しかでなかった。予想通り、相棒の顔はすこし歪む。

「声に顔・・・泣いてたの？」

「・・・まあ・・・」

気まずそうに視線をそらすリルに、レインは眉を寄せた。手をのばし、指でリルの目元をなぞる。

「まだ、赤くなってるから、もう一回洗ってきたほうがいいよ」

リルは目を丸くして、レインを見つめる。

「泣いてた理由、聞かないのね」

「リルが話したくなったらでいいよ。でも・・・」

レインはリルの頭を優しく撫でた。

「なるべく、一人で泣かないでね・・・」

なんでないてるの？

今のレインの姿と、幼い、初めて出逢った時のレインの姿が被さる。

そういえば……

リルは苦笑して、相棒を見た。

初めて私が笑ったのは、レインと会ってからだったなあ……
一番信頼している人。

これからもずっと、一緒にいるであろう相棒。

「それじゃあ、顔洗ってくるわ」

「うん」

そう言って二人はそれぞれの目的の場所へと行く。

「お、リルとレインじゃねえか」

食堂。いつもより遅かったせいか、人が多く、すこし苦労してリルとレインが席についた時、後ろから声がかかった。

振り返ると、そこには一人の青年がいる。

「あー。あんた生きてたの!？」

リルが驚いたように、その青年に声をかけた。

だいたい18くらいの年頃で、紺の髪に群青色の瞳をしている、が
たいの良い、人懐っこそうな印象をつける青年だ。

「おう!そういうお前も生きてたのかー。いやあ、よかったよ
かった!」

「久しぶりです。ガルド」

レインは微笑んで、青年、ガルドに近寄る。

「あんたがいるってことは、リリアも?」

「おう。いるぞ」

「呼んだ？」

「うわっ!？」

ガルドは驚いたように数歩後ずさる。そこには、飴色の腰に届くぐらの長い髪を両サイド三つ編みにした、薄桜色の瞳をした少女がいた。大きい瞳はすこし伏せめがちで、儚い印象をうける。

しかしガルドとリリアも、レインとリルと同じ、エクソシストの制服を着ており、胸に光る十字架クロスは銀だ。

リリアは5人いる女エクソシストのうちの一人である。

ガルドとリリアは、エクソシストの中で珍しい武器を得意としている。リルとレイン、その他のほとんどのエクソシストが使用している銃の形状をした悪魔退治用武器ではなく、短剣の形状をした武器を使用しているのだ。

二人はエクソシストになって初めて会ったのだが、そのコンビネーションはリルとレイン同等である。

二人はリルとレインと同期で、仕事仲間が一番仲が良い。

「リリア！久しぶり！」

「久しぶり。リル」

リリアは相変わらずの無表情だが、その声は柔らかい。

「俺の時と態度が違うなあ・・・」

「いつものことですよ」

「レイン・・・敬語そろそろやめてくれよ。俺たち親友だろ？」

「そうだねー」

「うっわ、棒読み！酷っ」

俺にはリリアだけだよ、とつぶやくガルドにリリアは「気持ち悪い・・・」と冷たい声を返す。

それもスキンシップらしく、ガルドは「お前も酷っ！」とわざとらしく泣き崩れる演技までお見舞いしてくれた。

一番はじめにその様子にリルが吹き出し、続いてレインも吹き出す。そしてリリアも顔を背けて肩をふるわせた。最後にガルド自身が笑い、四人の間に笑いが包む。

リルの顔には偽りのない笑みがあり、それにレインが安堵を息を吐く。その様子に、ガルドが微笑んだ。そしてレインの肩に手をおき、引き寄せる。

「よかったな。笑ってくれて」

「・・・ガルドには適わないな・・・」

レインは苦笑して、リルを見る。リリアと楽しげになにか話していた。

「よかった・・・」

「後で、なにがあったか話せよ。相談にのるぜ」

ガルドは少し心配げにそう言う。レインはガルドの顔をまじまじと見た。

「本当に相変わらずですね」

レインは思わず笑う。

この友人は何年たっても変わらないだろうな、と思い、また笑いがこみ上げてきた。

「二人してなにを話してるの？」

いつのまにかレインとガルドの間にリリアがいた。ガルドは驚いたように目を丸くする。

「おーすまんすまん。飯くうか！」

しかしガルドは慣れているのか、すぐ元の調子に戻って、朝食を注文しにいった。後に残ったレインとリリアは、お互い無言になる。

沈黙を破ったのはリリアだった。

「リルの様子」

その一言に、レインはやっぱりな、と思う。彼女が親友の異変に気づかないわけがないのだ。

「絶対、今度話してね」

「・・・うん・・・」

「私たち、今日任務入ってるから」

リリアは淡々とそう言っていると、リルの元へ帰って行く。

レインは息を吐き出し、そして、三人の元へ一歩踏み出した。

深夜。闇と静寂が広がる、昼間でも暗い人気のない場所に、リルはいた。

気配を完全に殺して、リルは壁にへばりつき、いつでも敵が出てきても良いようにしている。

いつも通りの悪魔退治だ。深呼吸して、リルは銃を持つ手に力を込めた。

「・・・」

夜中の冷え切った風がリルを包んでいる。コートを着ているからといって、むき出しの足にこの風はきつい。エクソシストの制服は動きやすいことをメインに考えてあるもので、軽い。神官の女用服はロングスカートだが、エクソシストはそうはいかない。ロングスカートだと足が動かしにくいからだ。だからってなぜ足がむき出しに

なるスカートなのか、リルはこういう時一番苛立ちを覚える。

ロングブーツなので下はそこまで寒くないのだが、太もも部分が寒い。顔をしかめて、リルは思わず舌打ちしそうになった。

「・・・っ！」

長時間ここで悪魔を待つていたが、ようやく気配を察知した。

「・・・随分と待たせてくれるじゃない・・・」

リルはそう低い声でつぶやくと、立ち上がった。

リルは壁で身を隠すのをやめて、気配のするほうへ躍り出た。手には任務に行く前にルウ爺から貸してもらった試作品銃が握られている。

気配の正体は、まだリルより幼い少女だった。

薄汚れた、所々破れたワンピース。むき出しの素足は細く、明らかに栄養が十分にとれていないことが安易に予想できるものだ。青白い肌は暗闇に異様に栄えて見えて、それが不気味だった。

黒く淀んだ半開きの瞳の下には闇をそのまま切り取ったような隈ができている。

まだそこまで悪魔化が進んでいない・・・

人間は悪魔と契約すると、日を追うごとに容貌はだんだんと悪魔に似ていく。まず、爪が黒く変色していき、伸びる。そして次は目が白くなっていくのだ。

この子はまだ助かる・・・！

リルの口元にわずかな笑みが浮かぶ。

銃の銃先を少女にむけ、うった。

「ッ！？」

少女は弾をうけた瞬間、その場に崩れ落ちた。この試作品銃はあたたった瞬間、身体中に痺れが走る効果がある、とルウ爺が力説していた。

少女は崩れ落ちたがすぐ立ち上がった。身体中がふるえている。そしてそのまま踵をかえし、悪魔は逃げる。

リルは焦ることなく追いかけた。

「まちなさい！」

銃先を逃げる背中に向ける。

引き金をひくと、少女はすんでのところでよけ、弾は屋根を貫いた。不吉な音が響く。

その音にもリルは慣れたため、たいして気にせずにもた引き金を引いた。弾は少女をかすったが、動きが速いため、また屋根を貫いた。
「・・・この・・・っ！」

リルは顔を引きつらせて、走る速度を上げた。

いつきに少女との間合いをつめ、引き金をひく。弾は少女の額を貫いた。そこで、リルは目を見開く。

「ガア・・・アア・・・」

少女の唇から低いうめき声が発せられる。額から、紅の液体が次々と流れていた。

「なん・・・で・・・!？」

リルは一步後ずさり、少女を凝視した。悪魔化は全然進んでいない。なのに、なぜ。

人間の身体に傷が・・・!？

少女は大きい瞳をこれでもかと見開き、小さい口からとどめなく血が流れ出す。

そしてそのまま後方に倒れた。少女の身体は、砂になり消える。

《リル!? どうした?》

耳につけられているピアス型の無線機から、相棒の音がする。

《いま、どこにいる?》

相棒の音が遠くに聞こえる。リルはその場で座り込んだ。その時。

「やあ、セルフイーナ」

風が、消えた。

リルはゆっくりとした動作で後ろを振り向く。そこには、あの異教徒の教会で会った、青年がいた。

純白の髪。ルビーの瞳は異様に暗闇で怪しく光っている。

「あんた、は・・・」

リルは、目を丸くして、青年、アーシャルを見た。

「アーシャルだ。もう忘れたのか？」

楽しげに笑いながら、アーシャルはリルと視線を会わせるようにかがんだ。

「セルフイーナ」

懐かしむように、アーシャルは女神の名を紡ぐ。

「・・・人違いじゃないの？私はそんな名前じゃないわ」

リルはアーシャルを睨む。酷く頭が痛い。まるで強く殴られ続けているような。

『アーシャル！』

自分と同じ声で、目の前の男の名を呼んでいる脳内の映像が、脳裏にちらついた。

アーシャルはそれに気づいているのか、いないのかわからないが、また愉快そうに笑う。

「いいや、お前はセルフイーナで会ってるんだ。まだ覚醒してないだけ」

だから、とアーシャルは続ける。

「覚醒させてやる」

そう言って、アーシャルのでかい手がリルの視界をおおった。

「・・・っ!？」

なぜかリルはその手をはじくことができなかった。心の中でそれを

強く望んでも、身体が言うことを聞かない。

「・・・・今、思い出させてやるよ」

悲しみに彩られた記憶を。

アーシャルは眉間にしわをよせて、そう呟いた。

自分の心臓の音しか聞こえない。

リルは目を見開いた。目の前にはただ闇が広がっていて、暑さも、寒さも、痛さも、なにも感じない。

そんな静寂の空間で、リルはただ一人、たっていた。

「・・・あ・・・」

リルはその場にへたりこんだ。いや、感覚がないため、自分自身、さきほどまでたっていたのかもわからない状態だ。

記憶を手繰りよせ、いままで自分がなにをしていたのかを懸命に思い出そうとする。

覚醒させてやる

弾かれたように、リルは顔を上げた。

「ここは・・・？」

思い出した。

自分は、アーシャルにわけのわからないことを言われて

。

そこから、わからない。

なにがおきたかも、覚えていない。

「どこなの？」

あたりを見回す。しかし、闇と静寂が広がっているだけで、なにもわからなかった。

その時。

《リル！》

どこか遠くから、聞き慣れた相棒の声が響く。その声は焦りを含んでいて、リルは思わず笑った。

きつと相棒はとても焦った、困ったような顔をしているのだろう。

安易に想像がつく。

そして、リルは振り返った。

そこだけ、ぼっかりとした穴がある。

「・・・？」

その穴をのぞき込むと、想像通りの相棒の顔があつた。

「レイン・・・」

リルはその穴に手を伸ばそうとする。が、それは寸でのところでなにか見えないもの弾かれた。

リルは眉をよせ、穴を見る。相棒の顔は怒りで染まっていた。

「レイン？」

なにを怒っているのか、リルにはわからない。

隣に、気配がした。視線をやると、そこにはアーシャルが起立している。

「アーシャル・・・」

掠れた声で名を呼ぶと、アーシャルが驚いたようにこちらを見るのがわかった。

「あの男は、お前が気を失っているから怒ったんだよ」

アーシャルは楽しげに笑う。

「よほど大切なんだな。お前が」

そう言ったアーシャルの顔は、声は、どこか悲しげに思えて。

リルは思わずアーシャルを見つめた。

「世界でたった一人の相棒なんだもの。一番信頼しているから。あたりまえでしょう」

その答えに、アーシャルのルビーの瞳は見開かれた。

そして次には低い笑い声が響く。

「ははっ・・・本当に、傑作だな。『一番信頼している』、か」

教会もなめたまねをしてくれる、とアーシャルはわけのわからない言葉を言い、リルを見た。

「お前を覚醒させる」

アーシャルの姿は、だんだんと闇に飲み込まれていく。

「つらいだろうが、我慢しろ」

その言葉には労るような響きが含まれていた。リルは首を傾げる。

「あんたは、私の敵なの？」

リルの問いに、アーシャルは一呼吸あけて答えた。

「味方だよ。なにがあっても」

次の瞬間には、闇ではなく新緑があたり一面に広がっていた。

リルはあたりを見回す。すると、隣に人が立っていた。

いや、人ではない。

だいたい6、7歳頃の年頃の少女は、野原の中一人で空を見上げていた。その空は雲一つない、美しい青空だった。リルの知っている世界ではそうそうみれないくらいの。

そしてなによりリルが驚いたのは少女の容貌だ。

少女は腰より長い金の髪に、大きい青の瞳をしていた。肌は白く、華奢な手足はすこし力をいれて握れば、簡単に折れてしまいそうだ。

その顔は、リルと瓜二つ。

この子がセルフィーナだ

リルは直感的にそれを悟った。

少女、セルフィーナは空をただ見上げていて、それだけで楽しいのか表情は微笑を浮かべていた。

「セフィー！」

背後から、まだ幼さの残る少年の声が聞こえた。

セフィー、とはセルフィーナの愛称だ。リルはその呼称になぜか酷く懐かしさを覚える。

「ゼウス！」

セフィーは花が咲くような笑みを浮かべ、振り返った。

背後には、漆黒の、闇の色をした髪に、紫水晶の瞳をした少年がいた。リルは瞠目した。

その顔は、レインとまったく同じだったのだ。

ゼウス、それはリルたちが崇める主神。

セルフィーナの双子の弟だ。

「みて、ゼウス！」

セフィーはゼウスに駆け寄り、手にもっていた淡い水色の一輪の花を差し出す。

「綺麗でしょう？さっきそこで見つけたの！」

「本当だ！母様に見せたら喜ぶよ！」

二柱は幸せそう微笑みあい、一緒に花を摘みに行く。

その姿はとても仲の良い普通の姉弟だった。

リルはただ二柱の後についていった。

さっきまでの一連の様子に、二柱にはリルの姿は映っていないということがわかったので、対して隠れることもせず、普通に二柱の後についていく。

二柱が花をつみ、母親らしき女性に花を渡すところで、リルの視界はまた闇に包まれた。

そして場面が変わり、セフィーの姿はリルと同じぐらいになっていた。

まるで鏡を見ているようで、リルはすこし気分が悪くなる。

なんでここまでそっくりなの！？

訳がわからず、セフィーを見つめる。

セフィーとリルの目があつた。リルは一瞬息をつめたが、すぐに自分は見えないのだと思いだし、胸をなで下ろす。

「ゼウス！」

セフィーの嬉しそうな声が耳に響いた。自分とまったく同じの声。

セフィーの視線を辿ると、そこにはレインが レインとま

ったく同じの姿をしたゼウスがいた。例外は髪の長さぐらいだ。レインは肩に届かないくらいだが、ゼウスは肩より少し長い髪を耳元でくくっている。ゼウスはセフィーを見て、微笑んだ。

「セフィー、どうした？」

ゼウスはセフィーの頬に手をあて、愛おしげに優しく声をかける。容貌が容貌なので、リルはとても複雑な気分になった。

「ゼウス・・・もうすぐよ。もうすぐ、主神が決まるの」

セフィーの言葉に、ゼウスの息はとまった。それを察知して、リルは怪訝な顔をする。セフィーはそれにすら気づいていないのか、今にも小躍りしそなくらい嬉しそくに話していた。

「誰がなるのかしら！」

セフィーは、周りが話していることをしらない。

『主神はセルフィーナになるだろう』

セフィーはきつと、主神になった者に一生仕える心づもりでいるのだろう。そしてただ純粹に、誰になるのかが知りたいに違いない。

「ゼウスがなるかもしれないわよ？」

悪戯な顔をして、セフィーは微笑む。ゼウスは精一杯の微笑みを返した。

「そうだな……」

リルはなぜかその言葉に不吉な感じを覚えた。
胸騒ぎがする。

そしてまた場面が変わった。

「セフィー！」

ゼウスの焦ったような声が響いた。
今度の場面は室内だった。

「ゼウス……？」

セフィーの、困惑した声。

ゼウスはセフィーの細い、華奢な身体を強く抱きしめていた。
「セフィー……愛している……」

その言葉に、セフィーの肩が震えた。リルはなぜか涙を流す。
止まらない。

悲しい、とても、とても、とても。

あなたは私を愛してくれた。
でも、私は

「私は、あなたの姉なのよ……ゼウス。そしてあなたは私の弟なの……」
だから

「私は、あなたの想いに応えることはできない・・・」

そう言うと、ゼウスは悲しそうな顔をして、部屋をさった。残されたのは、悲しげに瞳を伏せるセフィーと、泣いているリルだけ。

セフィーの瞳から、涙があふれた。

力なく崩れるセフィーは、細い肩をふるわせ、泣いた。

ごめんね

ごめんなさい

でも

でも

私はあなたの『姉』だから

ゼウス、ごめんね

でもいけないの

私は、あなたを

リルは、セフィーと同じように泣いた。嗚咽を繰り返し、ただただ泣いた。なぜか悲しかった。自分のことではないのに。悲しかった。

ゼウスはセルフィーナを愛していた。セルフィーナも、ゼウスを愛していた。

リルがようやく泣きやんだ頃、セフィーは泣き疲れてすでに眠った後だった。ベットの上で眠る少女の姿は本当に自分とそっくりだ。リルは泣きはらした赤い瞳で、セフィーは見つめていた。神話通りのことが起きるなら、セフィーは目を覚まし、そしてゼウスを殺そうとする。

しかし、セフィーを見てきてリルはそれを信じられなかった。

だって、彼女は、ゼウスを愛しているのだ。どうして殺せようか。

「……」

沈黙が広がる。リルは俯いて、時が過ぎるのをまった。

いくらたった頃だろうか。足音が聞こえた。それはだんだんとこちらに近づいてくる。

誰……？

リルは振り向き、足音の正体を見ようとドアノブに手を伸ばす。が、ドアノブはリルの手をすり抜けた。いや、リルの手がドアノブをすり抜けた。

触れもしないのね……

リルは自分の姿を見下ろし、嘆息する。すると、ドアが開いた。部屋に入ってきたのは、ゼウスだった。その顔は無表情で、恐ろしさを感じる。

ゼウスはセフィーに近寄り、肩を揺さぶる。

「ん……？」

セフィーは瞼をゆっくりとあけ、そしてその視線はゼウスをとらえるまで時間をかけなかった。

「ゼウス？」

セフィーはしっかりとした声音で弟の名を呼ぶ。ゼウスは微笑して頷いた。

「ああ。そうだよ」

セフィーは起きあがり、立った。

「どうしたの？こんな時間に・・・」

明日はいよいよ主神を決める日だ。なのに、なぜ。

ゼウスは微笑んだまま、徐に片手をあげ、力をこめて氷の刃をつくった。それは、ゼウスもセフィーも同等に使える力だ。

ゼウスはそれをまっすぐ、自分の腹部にさした。といっても、浅くだが。

セフィーは瞠目し、息をつめる。

「なにを・・・！？」

驚いて、セフィーは傷口に手を伸ばす。その時。

「クアラ！」

ゼウスは自身の側近の名を呼んだ。側近と主は契約を結んでいて、名を呼べばどこにいても必ず主の元へ召還される。

「セルフィーナ神・・・どういうことですか」

側近であるクアラは、ゼウスとセフィーを見比べ、低く呟いた。ゼウスの手につくってあった刃はすでにない。そしてセフィーの傷口にのびた手は傷を治そうと集めた力が漲っている。

端から見たら、セフィーが今まさにゼウスに害をなそうとしているところだ。

「セルフィーナは我を殺そうとした！自分の利益のために！」

ゼウスの浪々とした声が、室内に響く。

「大罪ですぞ・・・！セルフィーナ様！」

クアラは心痛な面持ちで、セフィーを見る。セフィーは手を握りしめた。

「違います！私は

」

セフィーが言い終わらないうちに、ゼウスは手に力をこめて、セフィーにはなった。セフィーは目を見開き、倒れる。

「いくぞ、クアラ」

「はっ」

ゼウスは側近を連れて、一番深い、と言われている穴にセフィーを落とした。

リルは目を丸くして一連の事件を見ていた。また目の前が真っ暗になり、そして次の瞬間には、隣にセフィーがいた。闇と静寂、そして寒さに包まれた空間で、セフィーは上を見ていた。

「ゼウス・・・」

セフィーは弟の名を掠れた声で呼ぶ。応えは返ってこない。

リルは眉を寄せて、セフィーを見ていた。セフィーの顔には、憎しみが無い。逆に悲しげな瞳をしている。リルも、普段ならば激昂するだろうが、なぜか怒りがわいてこなかった。

なんで

なんで

なんで

そういった想いしか、わからないのだ。

そんなことを考えていると、頭上から声がした。

「セフィー」

「ゼウス！」

セフィーは弾かれたように立ち上がった。

「ゼウス！ここから出して・・・！」

「いやだ」

「なんで！」

セフィーの悲鳴のような声に、ゼウスは動じず淡々と返した。

「お前は俺のものだ。セフィー」

「・・・ゼ、ウス・・・？」

セフィーの困惑した声が穴に響く。

「お前を主神になんかさせない。俺のものだ」

そういうとゼウスは、小さく笑った。

足音が遠のいていき、セフィーは一柱になった。

頬を伝う涙をぬぐいもせず、呆然とセフィーは空を見つめている。

「ゼウス・・・」

こんなことをされても

それでも

あなたを憎むことなんてできない

「セルフィーナ神」

上から男の声がした。感情のこもっていない、青年の声。

穴の上からおいてある岩から、青年の顔が透けて見えた。

白い髪に、ルビーのような瞳。

「あなたは？」

セルフィーナは、小首をかしげて、問うた。青年は無表情なまま、淡々と返す。

「お前の監視役、アーシャル。ゼウス神に造られたものだ」

「アーシャルっていうのね。初めまして。知つての通り、セルフィーナよ」

昔と変わらない笑顔を浮かべるセフィーを、アーシャルは無表情で見ている。

「なんで、笑っていられる？こんなところに閉じこめられて」

「だって、憎くないもの」

セフィーはさらりとそう返して、微笑んだ。

「私はずっとここにいても、それでもいいわ」

「なぜだ？」

一呼吸の暇もなく、アーシャルの問いがかかる。セルフィーナは、ゆっくりと、噛みしめるように言った。

「大好きだからよ。アーシャル」

誰が、とは言わずともわかった。

自分をここに落とし、そして永遠に閉じこめようとしている張本人を、大好きだと、そう言ったのだ。

「・・・理解できないな・・・」

アーシャルは思わずそう呟いた。その呟きが聞こえたのか、セルフィーナは鈴が鳴るかのように笑う。

「いつか、あなたもわかる時がくるわよ。世界で一番愛おしいと想えるような人ができたら」

「・・・しらん」

アーシャルはそっぽを向き、それきり黙ってしまった。セルフィーナは何度かアーシャルに話しかけていたが、いつのまにか話しかけるのをやめていた。

アーシャルが視線だけセルフィーナにやると、彼女は規則正しい寝息をたてていた。

「図太いやつ・・・」

アーシャルはそう呟き、空を見上げる。
その空は憎らしいほど綺麗な青空だった。

目の前がまた暗闇に包まれた。リルは力なく座り込んだまま、ぼつ、とただ前を見つめていることしかできなかった。

私たちが今まで信じてきたものは・・・

リルは自分の手を見る。細く、白い指先はかすかに震えていた。
偽りだったの・・・？

リルは両手で顔を覆う。涙なんて出なかった。心にあるのは絶望だけ。

あの異教徒の教会は、セルフィーナを崇めているものだった。
両手をゆっくりとさげ、リルは前を見る。暗闇に光がさした。

隣には変わらず、セルフィーナがいた。その姿はだいぶ大人になっていて、20代ぐらいだろうか。髪はもう身長くらいの長さで、ずっと閉じこめられていたにも関わらず、セルフィーナは美しさを保っていた。その顔は安らかな寝顔を浮かべている。

徐に、瞳があいた。

「・・・アーシャル！」

焦りの含んだ声が、名を呼んだ。

「セフィー」

アーシャルはすけた岩ごしでわかるほど焦っていた。リルはアーシャルがセルフィーナの愛称を呼んでいることに驚く。

「ゼウスが・・・恐ろしいものを・・・！」

セルフィーナは顔を真っ青にして、肩を震わす。アーシャルはその

言葉に頷いた。

「この禍々しい気配・・・」

リルはここでようやく気づいた。先ほどから感じる気配、それは、間違いなく『悪魔』のものだったのだ。

まさか、悪魔を造ったのもゼウス神だったの!?

驚愕に彩られた顔で、リルは二人の会話を聞いている。

「セフィー・・・大丈夫か？」

アーシャルの気遣う声を聞き、セルフィーナは真剣な面持ちでアーシャルを見上げた。

「アーシャル・・・」

「なんだ？」

「ここからでるわ」

セルフィーナの言葉に、アーシャルは目を見開く。

「な・・・」

「ごめんね。でも、これは赦せないの」

禍々しい気配が、人間界に降り立った。

自分が傷つくのはいい。それでゼウスの心が晴れるのならば、それでいい。

この行動の理由は知っているから、それでいいと思っていた。けれど

「身体を消滅させて、魂を人間に定着させるわ」

それは人間達という転生。

「そして、悪魔を倒す」

「だがお前だけの力で・・・」

「悪魔を倒す技術を、人間に教えるのよ。そして身体の寿命が終わったら、また別の器に入るわ」

「しかし・・・」

「大丈夫」

セルフィーナは微笑んだ。

「私は、ゼウスを倒す」

その一言は、妙に重く響いた。

「この手で、倒す。時がきたら、絶対に」

アーシャルは無言でセルフィーナを見つめた。

「その、時は・・・」

「私が・・・」

セルフィーナは曇りのない瞳で、アーシャルを睨むように見た。

「完璧に戦えるようになったら」

人間に転生することだといふ力を使う。そして、悪魔退治もしなくてはならない。

転生していき、完璧に力が回復したら。

「その時が、ゼウスを倒す時よ」

セルフィーナはそういい、立ち上がった。

「さようなら、アーシャル」

「俺も・・・」

そのまま、さようならと返すのかと思った。なのに思わぬ言葉に、セルフィーナは瞠目する。

「俺も、あんたと一緒にいるよ」

アーシャルはセルフィーナを見つめたまま、続ける。

「一緒に、ゼウスを倒す」

セルフィーナは泣きそうに顔を歪める。そして、俯いた。

「・・・ありがとう」

それが、セルフィーナの最後の言葉だった。あの美しい姿は闇に消え、穴には誰もいなくなつた。

「時が、きたら・・・」

アーシャルの呟きだけが、穴に響く。

「思い出したか？」

後ろから、アーシャルの声がした。リルはゆっくりとふりかえり、アーシャルの姿を視界にとらえる。

「……真実なの？」

「ああ。こんな嘘についてどうする？」

アーシャルはそっくり、踵を返した。

「戻るぞ。あの男がうるさくてしょうがない」

「あの男って……レイン？」

「そうだ」

アーシャルの姿は会話をしてるうちにかすんでいく。

「ねえ、アーシャル」

「なんだ？」

「なんで、レインとゼウス神の姿は似てるの？私は生まれ変わりだから似てるんだろうけど。レインは……？」

「ゼウス神の生まれ変わりではない」

その言葉に、リルは安堵の息をもらした。

生まれ変わりでは、ない。

しかし

アーシャルは瞳を細め、口を歪ませた。

本当に、なめたまねをしてくれる・・・

アーシャルは舌打ちしそうになるのをこらえ、拳を強く握りしめた。

第四章 1

仄かな蠟燭の明かりだけで照らされている長い廊下を、リゼルグは一人、歩いていった。見慣れた廊下だが、やはり通る度に緊張を伴う。目的地の前につき、深く息を吸い込むと、ドアノブに手を伸ばした。控えめな、ドアの開く音が響く。

「リゼルグ司教」

そこは、大司教の会議室だった。

真ん中にいる男、老人の声が響く。リゼルグは跪いた。

「教皇様」

大司教に囲まれ、中心に居座る人物、教会の最高権力者。

「顔を上げよ」

威厳にみちた声に従い、リゼルグは控えめながらも顔を上げる。

「報告は、本当なのだろうな？」

「はい。確かに」

リゼルグは淡々とした声で返した。教皇の、ほとんど白い眉が眉間による。

「ならば……リルディウス・ローズを……」

まるで名を口にするのも忌々しいというように、教皇はそこでいったん口を閉ざす。しかし、伏せていた瞳をあげ、教皇は再び口を開いた。

「リルディウス・ローズを、いますぐ捕らえ、地下牢に閉じこめよ！」

「っ！？」

リゼルグは弾かれたように顔を上げた。その瞳は驚き一色に染まっている。

「……どういことですか……？」

「理由など必要ない。いますぐ、あの女を捕らえろと言っているのだ！」

「なぜ、そう急ぐのです！」

リゼルグは声を少し荒げた。その様子に、大司教たちと教皇は顔をしかめる。

「……そうか、お前は知らないのだったな」

教皇はそう呟くと、リゼルグをまるで睨むように見据えた。大司教は沈黙を守っている。

「あの女は、女神セルフイーナの生まれ変わり……。そして、その相棒……。レインレット・アルスは……」

次に紡がれる言葉に、リゼルグは思わず息を止めた。

「リルっ！」

意識が戻り、リルは瞼を開けた。すると、目の前には見慣れた相棒の顔があった。

「レイン……？」

レインの顔に、さきほどまで見ていたゼウスの面影が重なる。リル

は悲しそうに顔を歪めた。レインはリルの身体を支えるように背に手を回し、前に立っているアーシャルを睨む。

「お前・・・リルになにをした・・・！」

「別に、なにも？」

アーシャルは口元を歪ませ、レインを見据える。

「お前も、近々わかるだろうさ。」

それじゃあな」

アーシャルはリルを一瞥し、背を向け、その場から消えた。それをレインは鋭い眼光で睨んでいる。

リルは呼吸を整え、レインの腕から離れた。

「もう大丈夫よ。ごめん、レイン」

リルは顔をあげ、微笑んでみせる。それにレインは微笑み返し、首を横にふった。

「うつん。全然、俺は大丈夫。リルの無事なようでよかった」

「・・・私も、全然怪我なんてしてないし、大丈夫よ。さあ、教会に帰りますか」

レインはそうだね、と言い、立ち上がる。屋根から音もなく地面に着地し、リルとレインは足を急がせた。

教会に帰ると、門のところに数人の警備神官がいた。いつも2人しかいないそこに、5人以上の神官がこちらを見ている。リルとレインは首をかしげ、怪訝な顔をした。

「なんだ・・・？あれ・・・」

「なにかあったの？」

神官の中心角であろう人物が、リルを鋭い眼光でにらみつけた。それに、リルは眉をよせる。

「とらえろ！」

低い声が、耳朶をうった。次の瞬間には、リルとレインの周りは神官で囲まれる。

「なんだ！？」

「なんなの！？あんたたち！」

リルは神官を睨む。神官は冷徹な目をリルに向けるだけでなにも言わない。

「レインレット様はこちらに！」

「リルディウスを捕らえろ！」

レインの腕をひっぱり、リルを囲む。レインは目は見開き、自分をつかむ神官の手を振り払った。

「なんなんだ！？なんでリルが・・・！命令したのは誰だ！」

レインは普段からは想像できないほど低い声で、神官に問いただす。神官は暴れるレインを押さえ込み、言った。

「リゼルグ司教からの命です。あなたはすぐに安全な場所へ」

「・・・は・・・？」

レインは目を見開き、力なくその場に座り込んだ。

「離して！なんなの！？」

リルは暴れ、自分をおさえこむ神官をことごとく蹴散らしていく。しかし神官はリルを押さええる手をとめない。

「っ・・・！」

「リルディウス・ローズ！これはリゼルグ司教からの命だ！おとなしくしろ！」

神官の怒鳴り声に、リルは動きを止めた。それをきに、神官はリル

を無理矢理教会内に引つ張っていく。

なんで、リゼルグ司教がリルを・・・！？

レインは目を見開いたまま、神官の手を振り払い、教会内へと走っていた。

リルは神官につれられるまま、歩いていく。薄ぐらい、しめった牢があつた。その一つに突き飛ばされる。

「なにを・・・！」

神官はリルの困惑した声を黙殺し、足を急がせその場をさる。リルは鉄格子をにぎり、左右に揺らした。

「出して！出せ！」

鉄格子は見かけによらず頑丈で、リルの力でもびくともしない。

リルは窓から見える夜空を睨んだ。

どうなっているの！？

頭が壊れそうだ。先ほどまでみていた記憶がすべて嘘ならいいのに、とリルは顔を歪ませて思った。

「リゼルグ司教！」

レインの怒鳴り声が響いた。大きな音をたてて扉が開く。そこには予想していた顔があった。レインはあいさつもせず、その人物の前へ急ぐ。

「どういうことですか！？なんでリルが・・・！」

「落ち着け、レインレット」

リゼルグの低い声がレインの言葉を遮る。レインは眉をよせた。

「落ち着け・・・？相棒が理由もなく捕らえられたのに、落ち着いていられると思いますか！」

「その理由を今から話す！いいか、レインレット・・・リルディウスは・・・」

リゼルグ司教は、レインを見つめた。

「リルディウス・ローズは罪に穢れた女神、セルフイーナの生まれ変わりだ」

リゼルグの声が、部屋に反響し、闇に消えた。

「・・・どういうことですか」

しばらくして、レインの呻くような低い声が落とされる。リゼルグは苦しそうに顔を歪めて、口を開く。

「リルディウスは、セルフイーナの生まれ変わりだ。そして、お前は・・・」

リゼルグはレインから視線をはずし、言う。

「ゼウス神の、愛し子なんだ」

『愛し子』

それは神が地上　人間界に降り立つときの器のことを示す。
神に選ばれ、神の加護を受けし者の呼称。ゼウス神の愛し子は、古くから教会に住み、大切にされている。愛し子の証は、まるで水晶のような紫の瞳をその身に宿す者だ。

「……教皇からの命だ……。レインレット、従え。我々の主神ゼウス様の愛し子であるお前が、憎きセルフィーナに穢されたらどうする?。」

その一言に、レインは目を見開く。齒を食いしばり、俯いた。

「ふざ……けるなっっ!。」

レインは怒声と共に、リゼルグの胸ぐらを掴みあげた。

胸ぐらを掴む手は、あまりにも怒りで小さく震えている。レインは目を見開き、リゼルグを睨んでいた。

「リルが、セルフイーナ神の生まれ変わり……？」

低いレインの、怒りをはらんだ声が響く。

それを向けられているリゼルグは無表情で、ただレインを見つめているだけだ。

「俺が、ゼウス様の愛し子……？俺はそんなことが聞きたいんじゃない。どうしてリルを拘束したのか、と聞いてるんだ！リゼルグ司教っ！」

怒声は虚しく響いた。リゼルグは先ほどと変わらず、冷静な面持ちで口を開く。

「リルディウス・ローズが我らが主神ゼウス神の『敵』だからだ。

そして、お前はゼウス神の愛し子……我々教会にとって保護すべき対象だ。リルディウス・ローズがお前に攻撃するかもしれないだろう」

その言葉に、今度こそレインの頭は真っ白になる。リゼルグの言葉がどこか遠くに感じた。

リゼルグの胸ぐらを掴んでいた手の力がゆるむ。数歩後ろに蹣跚め

き、レインは片手で目元を覆った。

「……あんたらは……」

低い、怒気のはらんだレインの声にリゼルグは眉を寄せる。

「あんたらは、今までリルのなにを見ていたんだ！」

「……そういう問題じゃないんだ、レインレット」

リゼルグは下に視線をやる。

レインはリゼルグを睨み、口を開いた。

「じゃあ、どういう問題なんだ！？今すぐリルを出せっ！」

激昂するレインをリゼルグはなだめるように肩に手を置いた。

「その望みは……叶えられない」

リゼルグは目を細めた。

「……すまない」

レインの腕は力なく垂れ下がる。

なにもできない

無力さに吐き気がした。

暗闇の中、リルは冷たい壁に身を預けていた。力なく両足は地面に投げ出され、その青の瞳は空虚を見ているように濁っていた。

「……」

着ていたコートを膝に無造作にかけているだけなので、寒い。窓から見える月光で、かろうじて自分のおかれている場所がわかる程度だった。指先がかじかんで動かなくなったら困るので、時たま指を動かす。

服から伝わる壁の冷たさに身震いする。

不思議と、助けて、という思いは抱かなかった。ただ、やはり、という思いが脳に染み込んでいく。

「セルフィーナ……」

掠れた声で、リルは自身の前の名を言う。

コートを握る指に力を込めた。

このままここに閉じこめられるなんて、冗談じゃない
窓から見える満月をリルは睨んだ。

「レインっ！」

焦った声音が自分の名を呼んだ。

レインは声のしたほうを振り返る。そこには声通りに、顔をしかめたガルドがいた。隣には、唇を噛みしめたリリアがいた。

「ガルド・・・リリアさん・・・」

レインは覇気のない声で友人の名を呟いた。ガルドは眉を寄せる。

「お前・・・どういうことだ？」

ガルドの質問に、レインは顔を歪める。リリアが一步前に出た。レインの瞳を睨むように見据え、リリアは口を開いた。

「リルは、どうしたの？」

怒気の波乱だ声に、レインの肩は一瞬びくついた。

「どうしたの？」

返答のないレインに、もう一度リリアは噛みしめるように聞いた。

「ここじゃ、はなせない」

ようやく出た言葉に、リリアは眉を寄せたが、すぐに口を開いた。

「じゃあ、あなたの部屋に行きましようか」

部屋につき、レインはうつむきながらも、ガルドとリリアにリルのことを話した。話している間、ガルドもリリアも無表情だった。

話し終え、レインは顔をあげる。ガルドは顔をしかめ、リリアは鋭い眼光でこちらを見ていた。

「・・・なるほどね」

リリアの呟きのような声は、部屋に重く響く。

「リルが、『罪に穢れた女神』の生まれ変わり・・・」

ガルドの言葉に、レインは頷く。

「あの教会で見た女神は・・・リルと瓜二つだった・・・」

穏やかに笑みをたたえたあの像が脳裏をよぎり、レインは齒を食い

しる。

「・・・おそらく、リルはもう一生、命がつきるまで牢から出られないでしょうね」

リリアは淡々と続ける。それがいつそう恐ろしく思えた。

「その・・・アーシャル？という男が、リルに接触したから、リルは捕らえられたんでしょう？教会側にとって、それは危険だった・・・」

「なんでだ？」

「あなた、話聞いてた？教会ははじめからリルがセルフイーナ神の生まれ変わりと知ってたのよ。レインがゼウス神の愛し子だと知っていたように。ではなぜ、いままでリルは捕らえられなかったのか？答えは一つ。アーシャルという男がリルに接触したから

これしか考えられない」

「なんで、初めからリルがセルフイーナ神の生まれ変わりって気づいてたんだ？」

「そんなこと知るわけじゃない」

一言でガルドの質問を切り捨てる。ガルドの顔が引きつった。

「こう考えないと理屈が合わないのよ」

「・・・どうすれば、リルを助けられるんだ・・・？」

レインは両手で顔を覆う。

「くそっ・・・！」

「・・・あなたが今なにをしても、リルの立場が余計悪くなるだけよ」

リリアの言葉にレインの瞳が凍り付く。

「・・・俺は・・・！」

苦しそうに言葉をはき出すレインを、リリアとガルドはただ見つめるだけだった。

「アーシャル」

風が、吹いた。

金の髪が大きく翻る。リルはまっすぐ、窓を見つめていた。

いつのまにか、窓に腰掛けている人物がいる。

闇の中でも光る瞳は、鮮やかな真紅。口端をつり上げ、男は笑う。

「決めたか」

リルは一度目をふせ、そしてあげた。深い青が、アーシャルを射抜く。

「ええ」

アーシャルは無言で、リルに手を差し延べる。リルはそれを一瞥し、深呼吸をひとつすると、自身の手をのばした。ふたりの手が重なる。

「ようやく、時が来たな」

セルフィーナ・・・」

アーシャルの、心底安心したような、嬉しいような響きをもった声音が、リルの耳朵をうった。

あの子と初めて逢ったのは、まだ10もいつてない頃だった。

「なんでないてるの？」

舌足らずな声で、少年は聞いた。

公園。いつも遊んでいるその場所に、見知らぬ少女が蹲っている。胸より長い金の髪をしたその少女が、ゆっくりとこちらを向いた。その青の大きい瞳からは、確かに涙が流れていた。

「なんで、ないてるの？」

少女と目線を合わせるように、少年はしゃがんだ。そして頬から伝い落ちる涙をぬぐおうと、手を伸ばす。

「っさわらないで！」

少女は、少年の伸ばされた手を慌てて手ではじいた。

少年は驚いたように紫水晶のような瞳を見開く。

「あ・・・ごめん」

手を引っ込め、少年は少女に笑いかけた。

「ぼく、レインレットっていうんだ！きみは？」

「・・・リルディウス」

渋々といった体でリルは答える。

レインは嬉しそうに、リルを見た。

「そっかあ・・・よろしく！リル」

「いきなりあいしょうなの？」

「じゃあぼくのことレインって呼んで」

レインは立ち上がると、リルにむかって手をのばした。

「・・・レイン・・・」

「うん！」

レインは元気よく返事を返した。リルは、伸ばされた手に、途惑い

ながらも自分の手を重ねた。

自然と、いつのまにか泣いていなかった。

「なんで、ないてたの？」

先ほどと同じ問いを、レインは口にする。リルは顔を伏せる。唇を強くかんだ。

「・・・わたしは、知らないこのの」

「そんなことないよ！」

レインは顔をしかめる。リルは瞠目した。

このこ・・・リズディアスと同じこといつてる・・・

「・・・でも、かあさまはそういうもの」

「なんで？」

不満そうに、レインは問う。リルはおずおずと口を開いた。

「わたしは・・・おとこのこじゃなくて、あたかもわるいから・・・リズディアスにはなれないから・・・」

問題を解く時間が遅かったときの、母の顔が脳裏をよぎる。顔を赤くして、眉を吊り上げて、高い声で怒鳴る母。

暴言と暴行の数々。リルは笑ったことがなかった。自分のおかれた状況がつらいとも思わなかった。でもやはり、母に罵倒されるのが、どうしても悲しい。愛されたかった。

「リズディアス？」

「・・・わたしの、かあさまのちがうおにいちゃん」

おにいちゃん、という単語をいうのが怖かった。自分にはその資格がない気がするから。だから、今言うときも、変に心臓がはねた。

「・・・リルは、リルだよ」

「え？」

母のことを思い出し、また泣きそうになったリルに、レインは言った。

「リルのおにいちゃんはリルのおにいちゃん。ぼくもぼく。リルもリルだよ。リルはいらなくなかない。だって、リルがきょうここ

にいたから、ぼくはリルとあえたし、ともだちになれたよ」

一生懸命言葉を探して言い募るレインに、リルは驚いたような顔を向けた。

「……ありがとう」

顔が綻びた。リルはその時、生まれてはじめて、リルは笑った。

「……うんっ」

レインもつられて笑う。

その後、二人は頻繁に公園で会い、いつしか共にエクソシストへの道を歩むことになる。

なにかが割れる音がした。

レインは弾かれたように顔を上げる。もうそろそろ寝ようと、ベツトに横になった時だった。

「なんだ!？」

窓を開け、外を見る。すると、リルが監禁されている牢のある棟の壁に大穴があいていた。

大穴の中心に、なにかいる。

夜のため、よく見えない。目を細めて、レインは身体を窓から突き出すようにしてそれを見た。

暗闇でもわかる紅い瞳が、こちらを見る。

「っ!？」

レインは慌てて部屋を飛び出し、外に出た。棟の周りには警備神官が囲んでいた。それをかき分けるようにレインは前に進む。

「レインレット様!？」

神官の中に、リルを捕らえた者がいた。制止の声を黙殺し、レイン

は進んだ。

「よお、また会ったな」

前に出ると、そこには予想していた人物がいた。

「・・・アーシャル」

記憶を掘り起こして、名を呼ぶ。アーシャルは笑った。

そのアーシャルの後ろで、影が動いた。その影に、月光が降り注ぐ。

「・・・リ、ル・・・」

アーシャルは、リルを護るように立ちはだかった。リルの顔は、俯いていて見えない。レインは歯がゆそうに顔を歪めた。

「そこ、通させてもらうぜ？」

アーシャルは手を伸ばし、口元を歪めた。その言葉と同時に、レインたちは吹き飛ばされた。警備神官のほとんどは気絶している。レインと数人が、立ち上がっていた。

「リルを、どこへ連れて行く気だ」

レインの低い声が響く。アーシャルは愉快げに笑った。

「ここより安全なところさ。本来セルフイーナがいるべき場所だ」

「ふざけるな！」

レインの怒声をアーシャルはおかしそうに笑い飛ばす。

「ならなんだ？ずっと、命がつきるまで永遠にここに閉じこめさせておいた方が、お前はいいのか？」

その言葉に、レインは息をつめる。が、すぐにアーシャルを睨んだ。
「そんなわけないだろう！」

「でも、お前じゃあこいつを助けてやれない。俺は、護れる。

だいたいなあ」

アーシャルの声音が冷気を含んだものに变化した。

「お前が、そんなこといえるのか？ゼウスの愛し子が」

レインは唇を噛みしめた。拳を力いっぱい握る。

「それじゃあ、時がきたらまた会おう。憎きゼウスよ」

アーシャルはそう言うと、後ろのリルを誘うように手を握った。リ

ルはアーシャルの顔を途惑いがちに見つめる。

「リルっ！」

レインの切羽詰まった声で叫ぶように名を呼び、手を伸ばした。リルはレインを悲しげな瞳で見つめる。

「・・・ごめん」

そう言うやいなや、二人の姿はその場から掻き消えた。

第五章 1

冷たい風が辺りを包む。

レインは呆然と、先ほどまでリルが立っていた場所を見つめた。伸ばしていた手をゆっくりと力なくおろす。俯いて、膝をついた。唇を無意識に噛みしめる。

「リル…っ！」

「レインレット…っ!？」

しばらくすると、焦ったような声が耳朶をつつた。力なく振り返ると、リゼルグ司教とガルドとリリアがいる。

「なにがあったんだ!？」

リゼルグがレインの両肩を掴み、揺さぶる。レインは濁った目でただリゼルグを見つめていた。

その頬を、リゼルグの隣にいたリリアが平手でうつた。乾いた音が響く。レインは瞠目し、リリアを見つめた。

「リルは、どこにいったの」

リリアは冷めた目でレインを見つめ、重々しく口を開いた。ガルドはレインを心配げに見る。

「…わから、ない…」

レインは首をのろのろと横に振った。掠れた声しか出ない。

「アーシャルが、リルを…」

『連れて行った』

そう言おうと思った。しかし、それはできない。

連れて行ったんじゃない。アーシャルは……

「助けたんだ………」

あの牢から。

リリアはしばらくレインを見つめた後、ため息を吐いた。

「……そう……」

もう用はないとでもいうように、リリアは身を翻す。

「あ、おい！リリア……」

ガルドは驚き、リリアを追いかける。リゼルグは、レインの肩から手を離し、目を伏せた。

「……………」

沈黙が広がる。

レインは、顔を上げた。

「俺は、リルの傍にいないほうがいいのか……？」

リゼルグはレインを一瞥した。風が頬をうつ。

「……………ああ」

レインはまた俯く。握っていた拳が震えているのを視界にとらえ、リゼルグはそこから目をそらした。

「いったあ……………！」

一瞬視界が歪んだ。と思ったら今度は尻に痛みが走る。目を開けると、そこはあの異教徒の教会だった。

顔をあげると、そこには自分とまったく同じの顔をした像がある。目を細めた。

「怪我はないか？」

隣で危なげなく着地していたアーシャルを見て、リルは睨んだ。

「あんたねえ…………… いったいどんな技だったの？」

「瞬間移動だ。空間を曲げた。常識だろう」

人間にとっては非常識だ。

リルはため息をはいた。

「ここはすぐ追手がくる。今日一日、休んだ後また移動するぞ」

「……わかったわ」

そう言っていると、リルは勢いよく顔をあげた。目を見開く。アーシャルの胸倉を掴みあげた。

「あんた、さつきレインのこと『憎きゼウス』って言ったわよね！
？どういうこと？」

アーシャルは目を丸くする。

リルの青の瞳はわずかに揺れていた。

「………… お前の相棒…… レインレットは、ゼウス神の『愛し子』だ」
リルの手から力が抜ける。

愛し子、と口だけ動かした。目を伏せる。

膝の力も抜け、リルは胸を押さえた。

リルの隣に腰をおろし、アーシャルは自身の上着を脱ぐ。

「ほら」

そして、リルの足に掛けた。リルは呆然と上着を見る。

そういえば、コートは牢においたままなんだった

どうりで足が寒いはずだ。

「寒いかな？」

こちらを気遣うアーシャルにリルは掠れた声で返した。

「大丈夫よ。 ねえ」

一拍おいて、リルは訪ねる。アーシャルがこちらに視線をやるのが
わかった。

「過去を見ただけじゃあ、やっぱりまだわからないわ 詳し

く教えて。あんたはなんなの？」

リルは睨むようにアーシャルを見る。

アーシャルは、リルを一瞥して答えた。

「ゼウスに作られた存在だ。本来なら、ゼウス神に逆らえない。し
かし、セルフィーナが………… お前が、自身の血を俺に飲ませた

ゼウスよりお前のほうが力が強いからな。俺の主はお前だ」

「……………なんで、セルフイーナに使えようと思ったの？」

その問いに、アーシャルは驚いたようにこちらを向く。そして笑った。

「なんでだろうな」

「いい加減な……」

それでも怪しいと、警戒しようとは思えない。リルは苦笑する。

「……………私は、どうなるの？」

囁くようにいったつもりだったのに、教会には異様にその声は響いた。アーシャルは顔から表情を消す。

「……………どういう意味だ？」

「リルディウス・ローズはどうなるの？」

噛みしめるように、リルは言った。リルの青の瞳とアーシャルの紅の瞳が交叉する。

「……………リルディウス・ローズの魂は、セルフイーナの魂に押しつぶされる」

背中に氷塊が落ちたような感覚になった。手を強く握りしめる。

「私は、いなくなるの？」

「違う。 セルフイーナになるんだ」

「どう違うっていうのっ!？」

リルの叫びが木霊した。

「お前のその身体能力は、セルフイーナの力だ。まあ、お前そのものの力も入っているが……………、お前の身体は着々とセルフイーナのものになっていく」

無意識に、唇を噛みしめた。鉄の味が口に広がる。

「私の身体は、私のものよ!他の誰のものでもないわ!」

立ち上がり叫ぶリルの腕を、アーシャルは掴む。

「なら、なぜ俺の手をとった？」

冷静な声に、リルは瞠目した。

「……………それは、……………ゼウス神を倒せば、悪魔がいなくなるから……………」

……」

悪魔を造っているのはゼウス神だ。元を消せば消滅する。

「確かにそうだな。しかし、本当にそれだけか？」

一つ一つの言葉に身が震えた。

今、ここにいるのは本当に私の意志？

リルディウス・ローズの意志？

わからない。

膝の力が抜けた。リルはその場で崩れるようにして膝をつく。

胸に手をあて、握りしめた。

嘘だ

「わたし、は………！」

どこまで、私の意志？

レインの手を振り切ったのは、本当にリルディウス・ローズの決断？

「もう、時間はない」

アーシャルの淡々とした声音が上から降ってくる。顔を上げることができなかった。

「ゼウス神も、教会も止まってくれない。お前はもう、逃げられないんだよ」

もう、後戻りはできない

「お前はセルフィーナなんだ。どう足掻いてもな」

月は、ただこちらに光を送るだけ。

誰も救ってはくれない。

夢を、見た。

それは残酷で、恐ろしいものだった。

空を切る自分の手を、レインはただ呆然と見つめる。こちらを見つめる青は、自分には止められない決意を宿していた。

「
っ」

名前を、呼ぼうとした。

しかし、それは音にならなかった。彼女はこちらに背を向ける。いつのまにか彼女の傍らに現れた青年の手を、躊躇なくとった。

青年は笑う。紅い瞳がこちらに向けられた。

「お前じゃあ、こいつは護れない」

その一言で、レインの身体は音をたてて硬直した。

瞠目して、レインは見ていることしか出来なかった。

嗚呼

どこかへ、彼女はいってしまふ

勢いよく目をあけた。重々しく上半身をおこし、レインは片手で目元を覆う。

頭が痛い。

荒い呼吸を何度か繰り返し、レインはベットから降りた。

頭を掻きながら洗面所に向かい、冷水で顔を洗う。ようやく完全に覚醒した。

「
.....」

鏡から見る自分の顔は酷いものだった。覇気のない紫がこちらを見ている。

「はっ」

自嘲の笑みを浮かべ、レインは数歩後ろに蹠踉めく。顎を伝って、雫が落ちた。

お前じゃあ、こいつは護れない

アーシャルの言葉が未だに鼓膜に焼き付いている。

確かに、そうだ。

牢に閉じこめられる彼女を自分は助けてやれなかった。

あの異教徒の教会の女神を見た時から、自分の奥でなにかが渦巻いている。

女神を見た時、心臓が不自然にはねた。

いままで凍ってたんじゃないかと思うくらい、血の流れを感じたのだ。

「くそ……………」

壁に拳を打ち付ける。歯を強く食いしばった。

彼女の手は自分を求めている。

彼女の手を取れるのは自分じゃない。

それがどうしようもなくもどかしかった。

鏡から目をさらし、レインは洗面所を出た。

少し濡れたため頬に髪が張り付く。それを手で払い、レインは自室に戻った。

寝間着からエクソシスト用の服に着替える。机の上に置いておいた十字架クロスを首にかけ、レインは窓から空を見た。

その空は憎いほど綺麗な青だった。

「レイン」

名を呼ばれて、振り返る。

そこには気まずそうに顔をしかめたガルドがいた。
思わず苦笑が漏れる。

「おはよう」

挨拶をすると、ガルドは瞠目した。

これでもかと瞳が見開かれる。

「……………おはよう」

しばらくして、それだけ言うと、ガルドは俯いてしまう。

「……………昨日のことは気にしなくて良い。リリアさんのこと、気にしてないから」

むしろ、リリアの行動はレインにとって助けだった。

あのままりゼルグに問いかけられても、なにも答えられなかっただろう。リリアの平手打ちでようやく我に返ったのだ。

「……………レイン……………」

ガルドが眉をよせてこちらを見ている。意を決したように口を開いた。

「お前……………今日は任務ないそうだ」

「……………そ、か……………」

それもそうだろう。

レインはため息をはいて、自室の方向へと向きを変える。

「それじゃあ」

ガルドに背を向けて、レインは片手をあげる。

「……………ああ」

小さくそう返し、ガルドはレインと正反対へと歩を進めた。

教皇は持っていた紙を落とした。

手からすべり落ちた紙に目もくれず、教皇は瞠目する。
唇が無意識に震え出した。

「……なん……だと……!？」

教皇は思わず立ち上がった。報告書を持ってきたリゼルグは目を細める。

「………どうしますか？」

リゼルグの問いに、教皇は裏返った声で叫んだ。

「リルディウス・ローズを捕まえろ！」

逃がさない、逃がさない。

「嗚呼………、ようやく刻が来たのか………」

暗闇で、青年は嗤う。

「セルフイーナ………」

愛おしそつに名を呼ぶと、青年は瞳をあけた。

その瞳は、暗闇でなを怪しく燦めく、紫水晶を宿していた。

何度でもその名を喚ぼう。

何度でも何度でも。

君が俺の手の中に還るまで。

音がした。

それは不愉快なほど大きいわけではなくて、ほんの少しの、小さな物音。

ゆっくりとリルは重い瞼をあけた。開けた瞬間に、光が目飛び込んでくる。思わずもう一度目を瞑り、顔を背けた。

「…起きたのか……」

アーシャルが驚いて振り返る。その顔には自分が起こしたのか、と心配げな色を宿しているのがわかった。リルは上半身を起こし、苦笑する。

「大丈夫よ。あんたのせいじゃないから。………今、何時頃？」

「だいたい、9時頃だろう。だいぶ寝ていたぞ、お前」

アーシャルの言葉に、リルは瞠目する。

「大丈夫なの？」

その問いの意味することを正確に読み取り、アーシャルは頷いた。

「ああ、大丈夫だ。………大丈夫じゃなくなるのは、これからだからな」

「そう……」

リルは俯き、身体にかけてあったアーシャルの上着を握りしめた。

「まだ、教会の連中は公には動かない。おめかけ俺たちには余裕がある」

「………大きく動けば、周りが不審に思うから？」

「そうだ。でも、油断はできない。昼飯食ったら、ここから離れたほうがいいな」

アーシャルの言葉が重々しく耳朵をうつ。

リルは一瞬青の瞳を揺らした。

わかってた。わかってるつもりだった。

でも、こうして現実を突きつけられると、どうしても辛い。

唇をかんで、振り切るように立ち上がる。

「ねえ、アーシャル。朝ご飯は？」

小首を傾げて問うと、無言でなにかを投げられた。反射的に手でキヤツチすると、それは赤い果実。

「……………お前が寝ているうちに買ってきた。ありがたく思え」

「随分と偉そうね」

思わず笑って、リルは林檎を一口囓る。口に甘い味がゆっくりと広がった。

10歳くらいの頃、兄と2人だけで出かけたことがある。

といっても、それは兄が強制的に自分の腕をひっぱって外に連れ出したのだ。

義母と父と兄、3人で行ったことはあったが、兄だけといったことなどなかった。

初めは困惑しかなかったが、次第に状況を理解して、自分の顔から血の気が引くのがわかる。

それに気づいた兄が、驚いて引つ張っていた手を離れた。

「大丈夫かっ！？リル！」

あんたのせいだよ、とはこの時さすがに言えなかった。

「リル？大丈夫か…………？」

顔を覗き込み、心配げに問いかけてくる兄に、リルは顔を顰める。

「大丈夫……………だけど、いいの？義母様にも、父様にも言わないで…

…」

「だーいじょうぶ！大丈夫！」

リルの問いに、リズは笑って答えた。その声は明るく、自信に満ちている。

「俺もう子供って歳じゃないし！」

14歳は子供じゃないのか。

リルは訝しげな瞳をリズに向けた。

「さあ！そんなこと、気にせず行こう、リル！」

またリルの手をつかんで、リズは突き進んでいく。リルは先ほど同様、たいした抵抗をせず、リズに連れて行かれるままになった。

人が多い中、リズは器用に間をすりぬけて進んでいた。

リルも同じように進んでいく。

ふと、リズがとまった。リルは首を傾げる。

「兄さん？」

昔みたいに、そう呼べないことはない。しかし、やはりどこかぎこちない響きがあった。

「ちよつとまって！」

そう言うやいなや、リズは走っていつてしまう。呆然とそれを見届けていたリルは周りを見回した。

通行の邪魔にならないよう、端のほうへよつてしゃがむ。

しばらくすると、リズが走ってくるのが見えた。立ち上がり、リルはスカートの裾を手ではらう。

「遅い」

開口一番にそういつて、リルはリズを睨む。リズは笑いながら、「ごめん」といった。その手には、茶色い紙袋が握られていた。

「なに？それ…」

首を傾げて問うと、リズははい、とその紙袋をリルに渡す。

以外に重い紙袋を落とすそうになり、慌ててしっかりと持ち直す。中を見ると、赤い果実、林檎が2個入っていた。

「林檎……？」

「うん。買ってきたんだ」

食べて、とリズは微笑む。困惑の様子を隠せないリルは、顔をあげ

リズを見た。

「……………」

恐る恐る林檎をとる。

ひんやりとした冷たさが片手を支配した。一口、林檎を嚙る。

「どう？」

興味津々に聞いてくるリズを見て、リルは頬を紅潮させて言った。

「おいしい……」

吐息のような言葉に、リズは満足げに笑う。

「よかった！」

林檎をもう一口嚙り、リルは微笑を浮かべた。

口に広がる味に、つい昔の思い出が甦ったのだ。

ゆつくりと味わって林檎を食べ終え、リルは女神の像を見上げる。

幸せそうな微笑を浮かべた女神の セルフィーナの像を、リ

ルは凝視する。

見れば見るほど自分と同じで、つい目を逸らした。

「食い終わったのか？」

声のしたほうを振り返ると、アーシャルがいた。

手には紙袋を2つ抱えている。ふと、脳裏に兄の姿が過ぎった。

「なに、それ……？」

「これか？服だ」

片方の紙袋を軽く持ち上げ、アーシャルはリルに投げてよこす。

しっかりと受け取り、リルは腰を下ろして中を見た。

確かにそこには服が何着か入っていた。

淡い、あまり目立たない女用の服に、フード付きのコート。

どこにでもあるような、一般的な庶民の服だ。

「これに今すぐ着替える。目立たないほうが良いからな」

そう言うと、アーシャルは踵をかえし、広場をでた。気を遣っているのだろう。

リルは紙袋を床におき、自分の着ていた服に手をかけた。

着替え終え、自分の姿を見下ろす。

膝より少し上まであるスカートに、靴はいままでのブーツ。上から着てあるコートは黒で、膝より下くらいまであるものだ。

動きやすいし、着心地も良い。

これなら万が一の時、ちゃんと戦えるな、とリルは安堵の息をはいた。

といつても武器は対悪魔専用銃しかない。教会の追手 人間相手には全然効かないだろう。

銃を持ち、遠くにあった柱に向ける。

銃声が響いた。

柱が音をたてて傷つく。物には直接被害がでる。

銃声を聞き、アーシャルがこちらに来た。珍しく焦った顔をしている。

「……………なにをしてるんだ？」

「……………別に、ちよつとした試し撃ちを……。それにしても、アーシャル、似合ってるわね」

白に近い水色の服と、紺色のズボン。黒のブーツに同じく膝より下まであるフードつきのコートに身を包んだアーシャルを、リルは見つめた。

白髪紅眼は、あまりアルディラルド王国には見かけない色彩のため、なるべく隠しといたほうが良い。

「はあ……。前の服は燃やすから渡せ」

アーシャルは大げさにため息をはき、片手を差し延べた。その手に
リルは先ほどまで着ていた、エクソシストの制服を渡す。
突如、アーシャルの手から炎が燃え上がった。
服は一瞬にして灰になり、流されていく。
それを見届け、リルは瞳を閉じた。

偽りの神話に終わりの詩を。^{うた}

第六章 1

違和感が、あった。

レインはふと、銃をうつ手を止める。

リルがいなくなって、3日たった。今日から普通に任務に入るこ
とになったレインは、ある街の悪魔退治をしている。

うつ手を止めたのはほんの一瞬で、すぐまた引き金に力を入れる。
「ギャアアツツッ！」

悪魔の断末魔が響く。口から赤黒い液体がこぼれ落ちた。しかし、
悪魔は倒れない。

「？」

怪訝な顔をして、レインは悪魔を見る。が、すぐにまた引き金を
引いた。

悪魔は口端を吊り上げて、嗤った。

「嗚呼……………あなたは……………」

^{しわが} 喰れた声に、レインの肩がびくつく。

「は……………ははははっ……………！」

悪魔の高笑いが夜の街に響いた。レインは一步後ろに下がる。
なんなんだ……………？この悪魔……………

もう三発以上うった。効いていたはずだ。なのに。

なんでまだ消えない……………！？

最近、悪魔の様子が変だった。ルエルでのエリザベスに取り憑い
た悪魔を初め、ほとんどがそうだ。まだ助かる段階なのに助からな
かったり、契約してだいぶ日がたってるのにまだ意識があったり。

「くそ……………」

そう吐き捨て、レインは銃先を悪魔に再び向けた。

アーシャルとリルは、人通りの少ない道を歩いていた。

フードを深く被っているので、お互い顔が見えない。夜の闇も加わって、姿も良く見えなかった。

リルは夜目がきくほうだが、アーシャルはどうなのだろう。

前を歩く青年を一瞥したが、結局聞かなかった。

「……止まれ」

小さく呟かれた声に、リルの足が止まる。

「どうしたの？」

同じく小声で問うと、紅い目がこちらを見た。

「悪魔だ」

アーシャルの見つめているほうを見ると、そこには男がいた。

あまり上質とはいえない服に身を包み、空を見上げている。その瞳は見開かれていて、口は弧を描いていた。男の服には赤黒いものがこびりついており、近くには女だと思われる肉の塊が力なく倒れている。暗闇の中でもわかる白い肌には紅いものが浸食していた。足は変な方向に曲がったおり、乱れた薄い茶色の髪は地面に広がっている。その地面には紅が斑を描いていた。顔はこちらから見えない。

男の手をよく見ると、紅い塊が握られていた。そこからまた新しい液体が伝い落ちて、地面に円を描く。

「……ここにいろ」

低くそう言うと、アーシャルはリルを壁の影に隠れさせ、自身は悪魔の前まで進む。

悪魔がアーシャルに気づいた。

「ああ……貴様は……」

悪魔の口が開く。禍々しい尖った牙がのぞいた。

「裏切り者お……！」

叫び突進してくる悪魔をよけ、アーシャルは首を掴む。
なにかが折れる鈍い音がした。目を見開き、悪魔の動きがとまった。

が。

「は……はははははははは……」

身体をくの字にして、悪魔が嗤う。アーシャルは驚いた様子を見せずに、ただ悪魔を見ていた。

「馬鹿があ……っつ！」

尖った爪がアーシャルの首を貫きそうになる。その瞬間、銃声が響いた。

「……リルディウス……」

アーシャルは、驚いたように目を見開いた。
振り返るとそこには銃を構えた少女がいて。

悪魔を睨み、リルはアーシャルを見る。

「ねえ、聞いていい？」

悪魔は完全に灰になる。それを見届け確認した後、リルが重々しく口を開いた。

「最近、悪魔の様子が変なのよ。………なにか、知ってる？」

リルはアーシャルを一瞥する。アーシャルはリルを数分見ていたが、正面に視線を変えた。

「……ゼウスが、セルフィーナを捕まえようと動き出したからだろうな」

アーシャルの紅の瞳が細められる。

「たぶん今頃……、『愛し子』のほうにも接触してるだろう」

「これで、終わり！」

最後の1人の悪魔を撃ち、灰になったのを確認してレインは安堵の息を吐いた。

服についた埃を払い、銃を片付ける。

「……………っ!？」

突如、激痛が全身を迸はじつた。

レインは膝をつき、両手で頭を抱える。顔を歪めて、小さく呻き声を漏らした。

「ぐ……………っあ……………っっ」

目を見開き、喘ぐ。しかし痛みは全然収まらない。

苦しいか？

その時、頭に自分と良く似た まったく同じの声音が響いた。

苦しいだろう、辛いだろう。我が愛し子よ

低い笑声が響く。

レインは歯を食いしばった。片手でコートを強く握る。

我が名はゼウス。貴様らが崇める主神だ

気がつくのと、暗闇の中一人で立っていた。

さっきまでの激痛が嘘のようになくなっていて、瞠目する。

いつの間にか、目の前に自分と瓜二つの男が立っていた。

唯一違うのは、髪の高さくらいだ。目の前に立っている男は胸ぐらいまである漆黒の髪を、首元あたりで括っていた。

男が嗤う。

「ようやく会えたな、愛し子。さあ、我にその身体を委ねろ」

そう言って片手を伸ばしてくる男 ゼウスを、レインは睨んだ。

「主神ゼウス様、俺は、あなたに身体を貸すことができません」

しっかりとした声音で、レインは拒否を示す。ゼウスが瞠目した。

「俺には、やらなきゃいけないことがあるのです」

リルを取り戻したい、とかそういうのじゃない。

ただ、会って、話がしたい。

切実にそう思ったのだ。

ゼウスはゆつくりと手を下ろした。そして、なぜかおかしそうに笑う。

「くくっ……………あっはははははっっ！」

片手で目元を覆い、ゼウスは笑った。さも楽しげに。しかし、レインには狂っているようにしか見えなかった。数歩後ずさる。

「はははっ……………！初めてだ……………我に逆らった人間は！そうか、……………はははっ」

散々笑っていたゼウスだが、突然笑うのをやめる。辺りを静寂が包んだ。

「……………でもなあ、愛し子……………」

低い、低い声が耳朵をうつ。

「所詮お前は、俺から逃げられないんだ」

顔をあげたゼウスの瞳には、狂気が渦巻いていた。

口が弧を描き、ゼウスは人差し指をレインに向ける。

「俺は時間がない」

レインの肩がびくつく。

その反応に、ゼウスはまた嗤った。

「いつまで足掻けるかなあ？……………お前も、あいつも」

あいつとは誰だ。

そう問おうと思ったが、できなかった。

目をゆつくりと開けると、そこは先ほどまでいた街が広がっている。

「……………なんだったんだ……………」

レインは立ち上がり、夜空を見上げた。

さあ、楽しい楽しい遊ゲーム戲をしようか。

悪魔の序曲も、偽りの神話ももう終わったんだから。

水面に波紋が広がった。

とても綺麗な湖だな、と思った。

水面に映る自分は、純白のドレスを着ていた。といっても貴族が着るような豪華なものじゃなくて、質素なワンピースだ。

金の髪が風に遊ばれた。

膝をつき、水面に手を伸ばす。その水に手が触れる瞬間、後ろに気配がした。

振り返ると、そこには自分がいた。

「はじめまして。リルディウス・ローズさん」

声まで同じだ。

後ろにいた自分は花のように微笑む。

「……………あなたが、セルフィーナ？」

問いじゃなくて、確認だった。

セルフィーナは目を細めて笑った。

「ええ、そう。私の名はセルフィーナよ」

そう言いながらセルフィーナはリルの隣に膝をつく。

同じ金の髪が、地面を掠めた。

「……………怒ってる？」

鈴の鳴ったような声が、耳朵をうった。セルフィーナのほうを見ると、微笑んでいる。しかしその瞳はなぜか悲しみを帯びているように見えた。

「……………怒ってるわ」

一拍のうちにそう答える。隣でセルフィーナが笑った。

「正直ね」

「それが取り柄なの」

変な感覚だ。

自分とまったく同じ姿の別人と話している。

「私、ね……」

セルフィーナは手を伸ばし、水面にそれを浸した。そこから波紋が広がる。湖は見るからに冷たそうなのに、寒くないのか、とリルは少し心配になった。

彼女はそんなリルの心中を察したのか、微笑を浮かべる。

「ゼウスを恨んだことがない、なんてことなかった」

まるで吐き捨てるようにそう言った。肘のところまで、セルフィーナは水に浸からせる。長い金のはらりと落ちて、音をたてて水とぶつかった。

「心のどこかで、恨んでいたのね……。それに気づかないふりをした。愛しているのは本当。狂おしいほど今でもゼウスが好きよ」

セルフィーナは水面のような静けさをもった瞳をリルに向ける。

「でも、あの子は決してはいけない罪を犯した。……。だから、せめて私の手で、あの子を……」

ゆっくりと、湖から手を離れた。白い指から水が伝い落ちる。

「ごめんなさいね……。あなたを巻き込んで」

リルは瞠目する。なにか言おうとしたが、言葉が喉で絡まってうまく言えない。

「私が完全に覚醒したら、あなたは消えるわ。あなたの肉体は、私のものになる」

リルの頬に、セルフィーナの手が触れた。セルフィーナの手は驚くほど冷たかった。

「あなたには、大切な人がいるのね」

セルフィーナの手が、リルの頬を撫でる。愛おしむように、壊れ物を扱うように。

「……本当に、巻き込んでごめんなさいね」

セルフィーナの瞳から、一筋の涙がこぼれ落ちた。

リルは呆然とセルフィーナを見つめる。

「ああ……。アーシャルが呼んでるわ。起きなさい」

セルフィーナはふと顔をあげ、微笑を浮かべた。
そして、セルフィーナの身体が少しずつ消えていく。完全に消えた時、リルの意識は遠くなった。

「きろ、起きろ。リルディウス」

頬を軽く叩かれ、リルは眉間にしわを寄せた。

「なにすんのよー……………」

半分寝ぼけながらの声なので、呂律がうまくまわっていない。

「はあ…………とりあえず、起きろ。今日この街を出るといっただろうが」

二人は今、王都のはずれの街の宿屋にいた。リルはベットからおりて、大きくのびをする。

「ふああ…………。もうそんな時間なの…………」

窓を見ると、もう夕方に近い。リルはコートをすばやく着た。ア

ーシャルは一足先に部屋を出ている。

人目につかないよう、二人は街から出た。

ふと、リルが空を見上げる。血のように紅い夕焼けが、こちらを見ていた。

「……………」

唇を強く噛みしめ、リルは視線を前に移す。

先ほどまで見ていた夢が、脳裏を過ぎった。

本当に、巻き込んでごめんなさいね

セルフィーナの謝罪が、今も耳にこびりついて離れない。

「ねえ、アーシャル」

「なんだ？」

アーシャルは前を向いたまま、リルに続きを促した。

リルは一瞬考えるそぶりを見せたが、顔を上げた。

「さつき、セルフイーナに会ったわ」

その表現は適切じゃないのかもしれない。

自分自身が、セルフイーナなのだから。

アーシャルは瞠目したが、すぐに紅い瞳をふせた。

「……………そう、か……………」

そういっただけで、アーシャルはなににも言わなかった。

「これから、どうするの？」

リルは、草木をよけながら、アーシャルに問う。

アーシャルはリルを一瞥し、すぐ視線をはずした。

「この国を出る」

「……………」

思わず息を止めるリルを気にせずアーシャルは淡々と続けた。

「お前の安全のためだ。今完全に覚醒してない状態でゼウスに会うのはまずい」

アーシャルの言葉に、リルは顔を顰める。

「ゼウスはこれから、お前を捕まえるために悪魔をこちらによこす。アルディラルドはゼウスの力が一番強い場所だ。一刻も早くここから出た方が良いな」

「……………そうね」

呟いて、リルは前を向いた。

「なら、早く出ましょう」

手を握りしめて、リルはそう言い切る。

アーシャルは無言で数秒リルを見ていたが、そうだな、と小さく返し前を向いて歩き出した。

「ゼウス神はまだ、遊びを楽しんでいる段階だ」

歩きながらアーシャルは語る。

「そうじゃなかったら俺もお前も今頃捕まってる。あと早くて2日でこの国を出るぞ」

それはリルにとってはとんでもないことだ。

「はあ！？馬車なしで！？」

「そうだ。出来るだけ遠くいくぞ。明後日にここをたち、船でサルナルス国に行く」

「……………わかったわ」

そう答え、リルは空を睨むように見上げた。

月の光が嫌いだった。

レインは夜空を見上げる。

窓ごしで、月が見えた。雲ひとつかかっていない月は、太陽のよ
うに激しく自己主張をせず、優しく輝いている。

それでもレインは、月の光が嫌いだった。

暗闇の中、すべてを照らすわけでもなく、ただ微かに照らす月光。
理由なんてわからない。ただ小さい頃から月光が、厭、月が嫌い
だった。

「……………満月」

満月だ。

ため息をはいた。前髪をかきあげ、ベットに倒れ込む。なぜか、
いつまで立っても眠気が襲ってこなかった。

しかたなく起きあがり、また夜空を見る。

夜空には満月がただこちらを照らし続けているだけだった。

「……………」

頭痛が迸る。

その場に倒れ、頭を抱えた。

「ぐっ……………ああ…っ」

口から苦痛の呻き声が漏れる。息が荒い。

頭が割れるんじゃないかと思うくらい痛かった。

そのままレインの意識は途絶えた。

夜だった。

ゼウスとセルフィーナは神殿を抜け出し、湖に来ていた。芝生に腰を下ろし、2柱は夜空を見上げる。

「綺麗ね」

セルフィーナが嬉しそうに言った。ゼウスはセルフィーナを数秒見つめ、すぐに視線を外して答える。

「……そうだね」

冷たい風が身体をうった。さすがに夜中に外に出るのはきつかったかもしれない。

「セフィー……寒くない？」

姉の身を案じ、そう聞くとセルフィーナは笑った。

「大丈夫よ！ゼウスこそ、大丈夫？」

小首を傾げて心配げに問う姉に、ゼウスは微笑を返した。

「大丈夫。……ねえ、セフィー」

「なに？」

少し顔を俯かせ、ゼウスはセルフィーナを見つめた。

「セフィーは、月が好き？」

その質問に、セルフィーナは目を丸くする。しかし、微笑んだ。

「好きよ。だって、夜の闇を照らしてくれるもの」

とても優しい光で、夜を照らす美しい月。

「ゼウスは、嫌いな？」

セルフィーナは首を傾げる。それにあわせて金の髪が揺れた。

「……嫌いだよ」

顔を深く俯かせ、ゼウスは掠れた声で呟いた。

セルフィーナは瞬きをする。

「なんで？」

「……月は、太陽の光のおかげで光ってる。なにかに頼らないといけないのが、嫌いだ」

眉をよせそう言うゼウスに、セルフィーナはそっかと空を見た。

細い腕を、月に向かって伸ばす。
「確かに、そうだね」

「う……………」
呻き声をあげて、レインは重い瞼を開けようとした。しかし、それは適わない。眠気に負けて、レインはそのまま意識を手放した。

アーシャルとリルは、森に流れている川の近くで休んでいた。暗闇の中無闇に歩くのは危険だと判断したからだ。

「あ、満月」
ふと、リルが空を見上げる。そこには雲ひとつかかっていない満月があった。思わず微笑む。

「ねえ、アーシャル。私ね、月が好きなの」
その言葉に、アーシャルは目を見開いた。
脳裏に浮かぶのは、いつかの少女。

『私ね、月が好きなの』
そう言っただけ笑ったのは、目の前にいる少女と瓜二つの女神。
「理由はね、わからない。…………でも、好き」
小さい頃からずっと。特に満月が好きだった。欠けることなく輝くその姿が。

「そう、か…………」

初めは瞠目していたが、アーシャルは微笑んだ。
それを見て、リルは目を丸くする。

また、空を見た。

変わりのない満月がこちらを見ていた。

リルは腕を月に向かってのばし、優しく微笑んだ。

第七章 1

愛してた。愛していた。ただど。

夢を見た。

辛く悲しい夢。けどどこか懐かしい、幸せだった夢を。
目をこすり、リルは上半身だけ起きあがる。そこで初めて自分が
泣いていることに気づいた。

頬を伝い落ちた涙は布団代わりのコートを濡らす。

「……夢……」

呟いて、目をもう一度こする。なぜか涙がまだこぼれ落ちていつ
た。

内容を覚えていないのに、なぜか無償に胸が痛い。

「どうした……？」

隣で仮寝をしていたアーシャルが起きた。リルは慌てて両手を振
る。

「な、なんでもない！まだ寝てていいわよ、アーシャルっ」

慌てて顔を背ける。泣いている顔を見せなくなかった。

「……本当にどうしたんだ？」

「大丈夫だって！ほら、寝た寝たっ！」

どうにか涙を抑えさえ、明るく振る舞うリルに、アーシャルは怪
訝な顔をしつつもう一度瞼を閉じる。それを見届け、リルは安堵の
息をはいた。

胸に手をあて、俯く。それに合わせて金の髪が流れた。

「……………」

瞼を閉じ、深呼吸してリルはまた横になった。

「もうすぐで、船だ」

アーシャルの言葉にリルは頷き、前を見た。

しばらく歩くと、海が見えてきた。日光が反射して輝く海に、リルは感嘆の息を漏らす。

アーシャルはまったく動じず淡々とした様子で近くにいる男に声をかけた。

「この船はどこ行きだ？」

アーシャルの口調に男は一瞬眉をよせたがすぐに口を開いた。

「サルナルスだよ」

ぶっきらぼうにそう答え、男は早足でその場を去ってしまう。リルはアーシャルを睨んだ。

「あんたねえ……、訪ね方つてもんがあるでしょうが！初対面であんな態度は駄目でしょう！？」

「人間の常識なんて知るか」

対するアーシャルは淡々と返す。リルは呆れて声も出なかった。

「……、なにを気にしているか知らんが、あの男とはもう会うことなんてないだろう？どんな態度だろうと関係ない」

アーシャルは呆れたようにため息を吐く。吐きたいのはこっちだ、リルはアーシャルをまた睨んだ。

「ほら、さっさと船に乗るぞ」

アーシャルはそう言うと言いつと背をむけ、先にいってしまう。リルはその背中を慌てて追いかけた。

我が愛し子よ

自分とそっくりの声が頭に響いた。

レインはふと顔を上げる。なにか声が聞こえた気がしたが、すぐに気のせいだ、と思い直すと前を見た。

昼。任務帰りで疲れた身体を引きずってようやく教会に着いたのが先ほどのことだった。

「はあ……」

シャワーを浴びて、レインは人心地つく。なぜか身体が重かった。愛し子よ

ゼウスの声が未だ耳に残ってる。信じたくなかった。

自分がゼウス神の愛し子だなんて、どうしても信じたくなかったのだ。だって、彼女は、リルはセルフィーナの生まれ変わりなのだから。

セルフィーナはゼウスの敵。ゼウスを殺そうとした罪に穢れた女神なのだ。

厭だ、と顔を横に振る。

そんなの信じたくない。

リルは罪に穢れてなんかない。

『穢れているよ』

ふいに、頭に声が響いた。

驚きに目を見開くレインに、嘲笑が響く。

『あいつは穢れている。俺が穢したんだからな』
そう言って、また嘲笑するのは誰だ？

レインは口を開いた。喉が哽れていて声が掠れていた。

「ぜ、ウス……神……？」

『そうだ。我が愛し子よ』

前が真っ暗になった。目の前に、ゼウス神が起立している。

『どうした？愛し子。ずいぶんと生意気な顔をしているぞ』

顔には笑みを浮かべながら、しかし瞳は全然笑っていない。

「……、穢した、とはどういう意味ですか？」

レインの感情を抑えた声に、ゼウスは笑みを深くする。

『その問いには俺は答ええない。まあ、安心しろ、近い未来にお前は厭というほど知ることだからな』

ゼウスの答えに、レインは眉を寄せる。どういう意味なのか図りかねているのだろう。数分したのちレインは、意を決したように顔をあげた。

「セルフイーナは、あなたが『穴』に落としたはずだ。なぜ、生まれ変わりとなって地上にいるんですか？」

ずっと、疑問に思っていたこと。

神話には『セルフイーナが穴に落とされ、悪魔をつくっている』
としか記されていないかった。悪魔をつくり、その後どうなったかは記されていない。

しかし、穴から出たとも記されていないのだ。

『……………』

ゼウスの纏う空気が変わった。

一気に肌をさくような、厳しい空気にかわったのを、レインは瞳目する。

『下らない質問だな……………』

ゼウスはその呟きを最後に、闇に溶け消えた。

サルナルスについた時は、丁度昼頃だった。

「んー……ついたあ……」

伸びをひとつして、リルは笑う。隣でアーシャルがフードを被りつつ、リルに問うた。

「昼飯を先に食うか、宿屋を探るか、どっちがいい？」

淡々とそう言うアーシャルの言葉に、リルは迷うように一瞬唸った。

「そうねえ……。じゃあ、先に宿屋を探しましょう」

「わかった。いくぞ」

頷き、アーシャルは前に進む。リルもそれにならい、サルナルスへと一歩踏み出した。

それから数十分、ようやく良い宿屋にありつけ、リルはベットに倒れ込んだ。久しぶりのベットなので、嬉しさがこみ上げてくる。

「柔らかい……」

枕を抱きしめ、リルは幸せそうに呟く。アーシャルはその様子を呆れた目で見ていた。

「……昼飯を食いに行くぞ。はやく起きろ」

苦笑してアーシャルは言った。リルは名残惜しげにベットから起きあがった。

宿屋から出て、2人はとりあえず市場を歩いていた。リルふと足をとめ、ある店を見つめる。

「アーシャル、あれおいしそう!」

リルは指をさして言った。その指先の示すものへとアーシャルが目を走らせると、それはパンだった。

「あれにするか?」

「ええ。あれが食べたい」

アーシャルの問いに、リルは深く頷く。幼い子供を相手しているような気がして、アーシャルは思わず笑みをもらした。

「じいさん、これ2つくれ」

パンを売っているお爺さんアーシャルは声を掛ける。お爺さんにはこりと優しい微笑をうかべ、手際よくパンを紙袋に包む。

「はいよ。合計銅貨4粒だ」

パンを受け取り、アーシャルはその細く皺の刻まれた手に4粒落とした。金は4国共通だから困らない。

「ほら」

アーシャルは焼きたてのパンをリルの手にのせた。

リルは嬉しそうにそれを口に運ぶ。一口たべ、顔を上げた。

「おいしい!」

満足そうにそう言うリルの頭を、アーシャルは無意識に撫でた。

リルは目を丸くし、瞬きをする。

しかしアーシャルの手を払いのけるようなことはしない。力はだんだんと強くなってくる。さすがにそれには焦り、リルは慌てて言った。

「ちょ……アーシャル!髪が、髪っ!」

リルの声によやく正気に戻ったのか、アーシャルは手をどかした。リルはアーシャルを睨む。

「ぐしゃぐしゃになったじゃない!」

「すまん、でもすぐ戻るだろ。大丈夫だ」

反省した様子もなくそう言うアーシャルに、リルは唸る。

「……確かにそうだけど……」

次第にこんなことで怒っているのが馬鹿らしくなり、リルはため

息をはきパンを食べるのを再開した。
ふんわりとした生地の中に、ほんのり甘いクリームの入ったパンは、とてもおいしかった。

「レイン様」

見慣れた食堂に、一人端のほうで黙々と食事をとっていたレインは、呼ばれたきがして顔を上げる。

前には、メリセリタが自分の食事をもって立っていた。

エメラルドの瞳は嬉しさで輝いていた。

「あの……、前、いいですか？」

いつもリルに話しかけている敵意丸出しの声でなく、猫なで声だ。別にいいですよ。どうぞ」

断る理由なんてないため、レインはすぐ了承した。するとメリセリタの頬が紅潮する。

「ありがとうございますわ！」

満面の笑みを浮かべ、メリセリタはレインの前に座る。そして、食事に手をつけず、レインを見ていた。

レインは首を傾げる。

「どうしたんですか？」

「え！？い……いいえ！なんでもないですわ！」

慌てて両手を振るメリセリタの顔は真っ赤だ。レインは怪訝な顔をしたが、食事を再開した。

「ねえ、レイン様、リルディウス・ローズが捕まった、て本当なのですか？」

メリセリタの言葉に、レインの手は止まる。それに気づかず、メリセリタは言葉を続ける。

「しかも、逃げ出したんですってね。まったく、馬鹿なことをしましたわね、あの人も」

そう言い、メリセリタは嘲笑を浮かべる。

「なにをしたか知りませんが、あのまま捕まっただけがいいものを」

その声には明かに侮蔑の色を宿していた。思わずレインはスプーンを持っている手に力を込める。

「ねえ、レイン様。あなたもそう思いませんか？そうですわよね。だっていつもあなたは迷惑していたでしょう？毎回毎回、なにか壊して。清々したでしょう？リルディウス・ローズがいなくなっただけ。その一言に、ついにレインは我慢できなくなった。

乾いた音が食堂に響く。

メリセリタは呆然と自分の片頬に手をあてた。立ち上がり、こちらを怒り狂った瞳で睨む人を見つめる。信じられなかった。

「レイン、様……？」

彼が自分を平手打ちした、という事実が頭に染み込む。食堂にいた人全員の視線が2人に集まった。

「……………これ以上、リルを侮辱するのなら、たとえ女性であっても容赦なんてしません。言葉は選んで発言してくださいね、アシユルさん」

低い声でそう言ってもう一度メリセリタを睨むと、レインは乱暴に食堂を出た。

昼飯を食べて、リルとアーシャルは宿屋に帰った。

腹が満たされて上機嫌のリルは、宿屋に入り一階の広場で、適当に椅子に座る。アーシャルはその真正面の椅子に腰を下ろし、カウンターに声をかけた。

「……林檎ジュースと、酒をくれ」

「はいよ」

カウンターから顔を出した女性にアーシャルは素っ気なく言う。
「だいたい30代後半くらいの女性は苦笑して奥に戻った。」

「ちよつと、私もう16よ？酒くらい飲めるわ」

先ほどまでの上機嫌はどこへ言ったのか、不満げな顔をして抗議するリルを、アーシャルは一瞥し、鼻で笑った。

「子供だろ」

その一言に、リルは余計不機嫌になる。

アーシャルは口を手で押さえ、笑いをかみ殺しているがその努力は無駄に終わった。結局笑いは収まらない。

「はい、林檎ジュースと酒だよ」

先ほどの女性は丁寧にリルの前にジュース、アーシャルの前に酒をおく。リルは林檎ジュースを一瞥し、手を伸ばした。一口飲む。

「…………おいしい」

一言呟いて、リルはジュースを一気飲みした。

「良い飲みっぷりだなあ、嬢ちゃん」

近くで数人で酒を飲んでいた男が笑いながらリルに言う。リルはコップをテーブル置いた。

「嬢ちゃんって歳じゃないわよ」

拗ねたようにそっぽを向くリルに、男は大きく笑う。

「はっはっは！そりゃあごめんな！」

そう言ってリルの背を乱暴に数回叩く。軽く叩いているのでそこ

まで痛くない。

薄い茶色にオールバックの髪型。ほどよく筋肉のついたがたいの良い身体に、日に焼けた肌。だいたい20代ぐらいの男は片手に酒を持っている。頬は少し紅潮しているため、酔っているのだろう。

「名前はなんていうんだい？」

男はいつのまにか椅子をこちらに持つてきて、腰を下ろしている。男の仲間までこちらに寄つてきた。

「……人に名前を聞くときは、まず自分から名乗りなさいよ」

リルの言葉に男は一瞬目を丸くする。しかしすぐ笑った。

「確かにそうだな！俺の名前はコウガだ！よろしく」

「……私はリルデウスよ」

名字も名乗ろうかと思つたが、やめた。男、コウガも名前だけだ。「で、こっちが私の従兄のアーシャル」

リルはさつきから無言で酒を飲んでいるアーシャルを指さし言った。アーシャルの非難の籠もった視線を向けられたが、気にしない。「そうかそうか。にしても嬢ちゃん長げえ名前だなあ。貴族様かい？」

『貴族』というところに皮肉が籠もっていた。それに気づき、リルは眉を寄せる。

「そんなわけないでしょう？私のこの格好が貴族の着ている、妙に派手でお世辞にも実用的だと言えないものに見える？」

リルはそう言つて肩をすくめてみせる。すると、コウガと仲間が吹き出した。

「確かに、そうだな。でもこの国のもんじゃねえだろ。二人とも」

「……そうよ。アルデイルドからきたの」

嘘を言おうと思つた。白を切ることもできたが、それはしない。下手にそれをする、逆に怪しまれる。

「そうなのか……。大国からどうしてこんな国にきたんだ？」

当然の疑問を投げかけるコウガに、リルは笑う。

「いろいろあつてね。アーシャルと、2人で旅することになったの

よ」

「そうなのか……。まだ20もたってねえのに大変だなあ。アルデイラルドと違って、この国は治安が悪いところもあるしなあ。気を付けるよ」

そう言つて、コウガは声を潜めた。

「あと、最近、悪魔のほうも多くなってきたしなあ」

コウガの言葉に、リルは顔を上げた。瞠目するコウガに構わず、リルは叫ぶように問う。

「それ、どういうこと!？」

「え?は?どういうことつて……。そのまんまの意味だぜ?最近、悪魔関係の事件が前より多くなってる、てだけ……」

「どうして、お前がそんなことを知ってる?」

いままで黙って酒を呷^{あお}っていたアーシャルが、徐^{おもむろ}に口を開いた。

「一般人には悪魔関係の仕事の数なんて知らされないだろう?なんで知っている?」

淡淡と言うアーシャルの言葉に、コウガは数回瞬きをした後、口端を吊り上げた。

「俺はこれでも警備兵なんだよ」

そう言つと、懐に入っていた身分証を出す。リルは目を丸くした。アーシャルは納得したのか、飲むのを再開する。

「と、いうことで気をつけるよ、リルディウスちゃん、アーシャル。二人にゼウス神の加護があらんことを!」

優しげに笑い、コウガは仲間のところへ戻る。リルはそれを呆然と見送ると、ため息をはいた。

ゼウス神のご加護、ねえ……

アーシャルは嘲笑を浮かべた。リルは窓を見つめ、吐き捨てるように呟く。

「ないことを祈るわ」

第八章 1（前書き）

第八章 1

暗闇の中、鈍い音が響いた。

煉瓦造りの壁に、紅いものが飛び散った。

鉄錆の臭いが広がる。荒い呼吸を何度か繰り返し、男は空を仰いだ。

紅く濡れた両手を前に翳す。自然と笑みが広がった。

嗚呼、殺してやった

彼の足下には、無造作に丸いものが転がっていた。それを男は軽く蹴る。重々しく、丸いものは転がった。蹴る力が弱かったので、少し移動しただけだ。

丸いものが月光で照らされる。

白目をむき、口から赤黒いものを流す、男の首だった。壁に力なくよしかかっているのは、胴だ。

「くっはははははははっ」

男の嗤い声が、闇夜に響いた。

「ねえ、また出たらしいわよ」

「ええ！？また？」

「うん。……本当怖いわあ……。犯人、まだ捕まってないんでしょう？」

「まったく……。警備兵は一体なにしてるんだか」

朝、3、4人で輪を作り噂していた婦人の話に、リルは立ち止まった。そして、その婦人達の方へ寄る。

「なんの話ですか？」

婦人達は突然現れたリルに驚きつつも、丁寧に教えてくれた。

「あら？あなた違う国の人？それなら知らないのも仕方ないわね」

「ここ最近、無差別殺人が起こってるのよ」

それから順番に婦人達は自分の知っている情報を喋った。婦人達の説明を聞き、リルは微笑んだ。

「そうですか……。それは物騒ですね。ありがとうございます」

「物騒よねえ……。でも、それをなくしたらこの国はとても良い国よ」

婦人の一人がそう言って微笑む。それにリルは微笑み返し、背を向けた。

「アーシャル！」

リルは宿屋に帰り、勢いよく扉を開けた。中にはアーシャルが本を読んでいる。

「なに読んでいるの？」

「……サルナルスの歴史書」

「うげえー。そんなもん良く読めるわね」

顔を顰めてリルは数歩後退した。その様子にアーシャルはため息を吐く。

「それで？なにか俺に用があつたんじゃないのか？」

「あ！そうだった……。あんだ、今ここで起こってる無差別殺人事件知ってる？」

アーシャルはリルの言葉に目を見開いた。その様子に、リルは知らないとわかる。

「知らないのね……。私は今知つたんだけど。どうにも今日被害が出たらしいわ」

今回の6人目なのだという。一ヶ月前から度々あつたらしい。被害者は全員男で、それ以外は共通点がない、と婦人達は話してい

た。

「でも、所詮は一般人の情報だから……。本当は共通点があるのかもしれないわ。それと、殺し方が酷いらしいのよ」

なんでも、腑を裂いた後、首を切るらしい。

「悪魔の可能性が高いな……」

「そうよね。それに、あの警備兵……コウガも『最近悪魔関係の事件が多い』と言ってたし」

リルは顎に手をあてて、口を開く。

「もう教会もとくに動いてるはずよね……。なのになんで未だに悪魔を退治できてないのかしら？」

「追いつけないんだろう」

「は？」

アーシャルの答えに、リルは怪訝な顔をした。

「ここはアルディラルドじゃない。サルナルスだ。アルディラルドほど教会はでかくないし、人数も少ない。エクソシストなんて神官よりもっと少ないだろう。最近、悪魔関係の事件が多いと言ってたな？他の仕事もあって、追いつけないんだろう」

「まあ……そうかもしれないけど……。それだったら他国に協力してもらうとか」

「他国も他国で忙しいんだろうな。悪魔が強化されているから。とても協力を頼める状況じゃない」

もちろん、アルディラルドも。と言ってアーシャルはリルを一瞥した。リルは顔を顰める。

「確かに……そうね」

今この国も、他の国も忙しい原因は、私なんだ……

リルは拳を強く握りしめた。

第八章 1（後書き）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9748o/>

クロス・ローズ

2011年9月29日14時30分発行